


碩士學位論文

恐怖の比喩表現の考察

-ホラー小説の主人公の五感を通して-



濟州大學校 大學院

日語日文學科

伊藤 江美

2010年 8月

恐怖の比喩表現の考察
—ホラー小説の主人公の五感を通して—

指導教授 李 昌益

伊藤 江美

이 論文을 文學 碩士學位 論文으로 提出함

2010年 8月

伊藤江美의 文學 碩士學位 論文을 認准함

審査委員長 _____ (印)

委 員 _____ (印)

委 員 _____ (印)

濟州大學校 大學院

2010年 8月

[要旨]

恐怖の比喩表現の考察
—ホラー小説の主人公の五感を通して—

伊藤江美

済州大学 大学院 日語日文学科

指導教授 李昌益

言語の重要な機能は情報伝達であると一般的に言われている。そして私たちの言語理解を助けるために比喩表現が多く使用される。近年の比喩研究では認知言語学の立場から概念メタファーの存在が明らかになり、人間の言語認識に焦点が当てられている。本論では人間の恐怖の感情の比喩表現を取りあげ、比喩を理解する人間の言語認識を明らかにした。

研究対象はホラー小説中の主人公が恐怖を感じている場面から恐怖の比喩表現を採集し、二種類の方法で分類した。

最初に意味別に喩辞と被喩辞をそれぞれ9項目（人間・動物・植物・自然物・人工物・身体部位・知覚・抽象物・未知）に分類し使用率を調べた。その結果、被喩辞は人物の感情や感覚を表現する項目が一番多く、喩辞は人間の項目が多かった。

さらに、人間が恐怖を感じている時、外界のものをどのように理解しているのかを考察するため、比喩を人間の感覚別に分類した。感覚とは人間の五感に内臓感覚を入れた6感、そしてそれと共に生まれる精神活動も含めた。外界のものを大きく2つ（生物・人工物）に分け、それを細かく7つの項目（人間・動植物・虫類・気体・液体・固体・自然物）にわけ考察した。

その結果、感覚で得られた情報や自分の感覚を主体に対して害のある生き物に、特に人間に置き換えている表現が多くを占めた。生物に置き換えられていないものには、視覚の拡張表現として視線や目、そして聴覚の声や音、内臓感覚の心臓、そして、抽象物の言葉だけであった。そして自分にまったく害のないものとなっているのは、聴覚から得られる音と内臓感覚の心臓の二つだけであった。このように

感覚主体が恐怖を感じている時、周囲の多くのものを自分を脅かす存在として感情・意思のあるものに置き換えて認識していることが明らかになった。



[초록]

공포의 비유 표현의 고찰
- 공포 소설의 주인공의 오감을 통해서 -

이토우 에미

제주대학교 대학원 일어일문학과
지도교수 이창익

언어의 중요한 기능은 정보 전달이라고 일반적으로 말하고 있다. 그리고 우리의 언어 이해를 돕기 위해서 비유 표현이 많이 사용된다. 근년 비유 연구에서는 인지언어학(認知言語學)의 입장에서부터 개념(概念)은유의 존재가 밝혀져, 인간의 언어 인식이 주시되고 있다. 본고에서는 인간의 공포를 나타내는 감정의 비유 표현을 채택하여 비유를 이해하는 인간의 언어 인식을 분명히 하고자 한다. 연구 대상은 공포 소설중의 주인공이 공포를 느끼고 있는 장면으로부터 공포의 비유 표현을 취합하여 2종류의 방법으로 분류했다.

첫 번째 방법으로는 의미 별로 유사(喩辭)와 피유사(被喩辭)를 각각 9항목(인간·동물·식물·자연물·인공물·신체 부위·지각·추상물·미지)으로 분류해 사용률을 조사했다. 그 결과, 피유사(被喩辭)는 인물의 감정이나 감각을 표현하는 항목이 제일 많고, 유사(喩辭)는 인간의 항목이 많았다.

게다가 인간이 공포를 느끼고 있을 때 외계의 것을 어떻게 이해하고 있는지를 고찰하기 위해(때문에) 비유를 인간의 감각 별로 분류했다. 감각과는 인간의 오감에 내장 감각을 더해갈 수 있던 6감, 그리고 그것과 함께 태어나는 정신 활동도 포함했다. 외계의 것을 크게 2개(생명체·인공물)로 나누어 그것을 다시 7항목(인간·동식물·충류·기체·액체·고체·자연물)으로 나누어 고찰했다.

그 결과, 감각으로 얻을 수 있던 정보나 자신에게 해가 되는 생명체, 특히 인간에게 비유 하는 표현이 대부분을 차지했다. 생명체로 비유되지 않은 것에는, 시각의 확장 표현으로서 시선이나 눈, 그리고 청각의 소리와 목소리, 내장 감각의 심장, 뿐이었다. 그리고 자신에게 전혀 해가 되지 않는 것은 청각으로부터 얻을

수 있는 소리와 내장 감각의 심장의 두 개 뿐이었다. 이와 같이 감각 주체가 공포를 느끼고 있을 때 주위가 많은 물건을 자신을 위협하는 존재로서 감정·의사가 있는 것에 옮겨놓아 인식하고 있는 것이 밝혀졌다.



目次

要旨[일본어]	i
초록[한국어]	iii
I.はじめに	3
II. 先行研究	4
III. 比喩	5
3.1. 比喩とは	3
3.2. 比喩の特徴	6
3.3. 言語学からみた比喩	7
IV. 恐怖	9
4.1. 恐怖の定義	9
4.2. 恐怖を覚えるもの	12
4.3. 恐怖の程度	14
4.3. 調査資料の恐怖の種類と程度	15
V. 調査資料	18
5.1. 調査対象の選定	18
5.2. 比喩採集における問題点・範囲・基準	20
VI. 調査結果の分類	22
6.1. 意味別分類	22
6.1.1. 体言の比喩表現	22
6.1.2. 人物の状態の表現	25
6.2. 感覚別分類と考察	27
6.2.1. 視覚	27
6.2.1.1. 目	28

6.2.1.2.	視線.....	28
6.2.1.3.	描写.....	29
6.2.2.	聴覚.....	35
6.2.2.1.	音.....	35
6.2.2.2.	声.....	36
6.2.2.3.	静寂.....	37
6.2.3.	嗅覚.....	38
6.2.3.1.	匂い/臭い.....	38
6.2.4.	皮膚感覚.....	39
6.2.4.1.	冷.....	39
6.2.4.2.	触.....	40
6.2.4.3.	痛.....	41
6.2.5.	内臓感覚.....	41
6.2.5.1.	心臓.....	42
6.2.5.2.	感覚器官.....	42
6.2.6.	精神活動.....	43
6.2.6.1.	思考.....	43
6.2.6.2.	心.....	45
6.2.7.	考察結果.....	49
VII.	おわりに.....	52
	参考文献.....	53
	Abstract.....	57

I. はじめに

言語の重要な機能は情報伝達や行動制御であると一般的に言われている。しかし、実際には、情報伝達だけを目的としないものも少なくない。比喩もその一つである。比喩ははっきりしない対象に対して、聞き手、読み手に事柄を分かりやすくするために用いられる場合と修辭的に文を彩るための表現としても使用されている。実際、情報伝達のみを目的にしたニュースなどでは、工夫を凝らした比喩を使う機会が少ないだろう。しかし、文学では文章に彩りが必要となる。彩りをそえ、また読み手に強い印象を与え、そして主人公の視点から具体的に目に見えているもの、感覚、感情などを読み手に想像させなければいけないからである。

比喩は現在、様々な分野で研究がなされている。これまで言語学でも比喩は話し手、書き手の技術に注目し研究がなされてきた。しかし、現在では聞き手、読み手の比喩の理解過程とその影に潜む人間の言語認識に注目している。比喩は思考や行動様式と関係があることが近年の認知言語学において明らかになり、表現の手段にとどまらず認識の手段であると考えられるようになったからである¹。私たちの言語の裏に隠されたものを知るために、本研究では言語学の立場から比喩を考察し、比喩表現に潜むものを私たちはどのように認識しているのか、人間の言語認識を探っていく。その研究対象の比喩表現として恐怖の感情に焦点を当てた。恐怖とは、心理的にもっともダメージを与える感情であるため、豊富な表現が使われていると考えたからである。調査対象となるのはホラー小説から採集した恐怖の比喩表現である。恐怖を感じている主体が五感を通して外界をどのように捉えているのか、また恐怖の感情とはなにかを研究の対象とし、感覚主体の内外世界を表した比喩表現から私たちの言語認識を明らかにしていく。

¹ 野内良三 (2000) 『レトリックと認識』 日本放送出版協会, p10

Ⅱ. 先行研究

比喩の研究は様々な分野で行われており、言語学の分野でも多くの研究がなされている。その中で恐怖の感情の比喩を扱った研究はあまり多くなかった。恐怖の感情についての先行研究として、Kovecses(2000)は、言語と感情の相互関係において、基本的な感情を表すメタファーを取りあげ、感情をどのような比喩表現で表し、その隠喩から感情が何に喩えられて私たちに理解されているのかを明らかにしている。その中で一般的な感情の一つとして恐怖を挙げ、恐怖とは「容器の中の液体・軍事的なもの・重荷」や恐怖固有の概念として「隠れた敵・超自然的なもの」に置き換えて私たちが認知していると述べる。楠見(2005)は恐怖の生起メカニズムと題して恐怖の言語表現を身体語彙、擬音語・擬態語、隠喩の3つにわけて考察している。恐怖によって起こる表情、姿勢、内臓、部位の変化、生理的变化や恐怖を感じている時に発する擬音語、状態を表す擬態語を挙げている。また恐怖の隠喩表現としてKovecses (2000) を参考に日本で使用されている恐怖の表現から概念を明らかにしている。김주연(2007)は、恐怖の感情は<全身の肌に粟を生じた><蒼ざめた顔>などのように身体の生理的現象を通して表現される換喩的様相があり、また恐怖は<恐怖がやってくる><恐怖が襲う><恐怖を味わう>などの隠喩により「生命体、敵、物、液体、食べ物」などに喩えられ、概念化されるということを明らかにしている。

恐怖を示す比喩には、身体を媒介にする換喩表現と恐怖の概念メタファーが述べられる。これらは恐怖の感情をどのように表現しているか、どのように捉えているかのみであり、恐怖を感じている主体が外界²をどのように知覚し、どのように認知しているのかは研究の対象になっていない。言葉には外界の知覚と理解が大きく反映されていて、言葉の意味や思考、推論、判断には五感などの身体感覚を通しての認知プロセスが重要な要因となっている³ため、恐怖の感情を理解するにあたって外界に対する認識も大切な研究材料だと考える。

² 外部世界。認知主体をとりまく客観的な外部の世界。

³ 山梨正明 (1999) 「外界認知と言葉の世界」『日本語学』第18巻9号, 明治書院, P4

Ⅲ. 比喩

3.1. 比喩とは

私たちの身近にはいつも比喩が存在している。対話の時は送り手しか知らない情報を、受け手に説明する時であったり、送り手の伝えようとする物事を受け手に強調したい時に比喩が多く用いられる⁴。その他にも、文章などでは、修辞技法として扱われたり、物体のない表現しにくい感情や体内の様子など読み手の理解を促すためにも比喩が使われる。次の文章は人間が恐怖に襲われた時の状況を文章で表したものである。人間の感情のように物体がないものは多くの比喩によって表現されていることがわかる。

恐怖に襲われた人間は、まず、息を止め、彫像のようにじっとしている……失神の初期のように、血液が一挙に引いてしまったかのように肌がまたたく間に青白くなる（死体のような青白さ）……皮膚の表面は、冷たいのに、すぐ汗に覆われる……全ての毛が逆立つ……どの筋肉も腫れ物ができたようにふくらんで硬くなる……大きく見開かれ突き出た目は恐怖を引き起こしたものをじっと見つめている……瞳孔は極度に開いている……口は大きく開いている……一瞬我々は息を止める……時として、心臓は収縮を止め、失神が突発的に起こる⁵。

この説明の中には多くの比喩が使われている。「恐怖に襲われる」は隠喩⁶であり、「恐怖」が被喩辞⁷となり、「襲ってくるもの」が根拠⁸となる。隠喩の場合

⁴ 比喩の目的に関しては、中村（1977）に詳しい。

⁵ チャールズ・ダーウィン『人間と動物の情念の表現について』。フィリップ・デュボワ「身も凍る恐怖」リポート、p215 から引用。

⁶ 直喩と共に類似性に基づく比喩に分類。被喩辞と喩辞のつながりが類似性を説明するものである。

⁷ 被喩辞とは比喩文中でたとえられる語であり、「主題、トピック、テナー、趣意」などと呼ばれる。

⁸ 類似性。比喩表現には三つの三要素が関係する。「喩えられるもの」「喩えるもの」そして類似性を示すものを「根拠」としている。

辞⁹がないため根拠から導き出さなければならない。したがって喩辞は文脈や類似点から聞き手や読み手に「連想¹⁰されたもの」ということになる。ここでは襲ってくるから連想される「敵」が喩辞となりうるが、「動物」である可能性もあり、隠喩を含む文は多義的であるといえる。次に、恐怖を感じている人を「彫刻のように」「死体のような青白さ」と直喩¹¹で表現している。私たちは恐怖など危険を感じる時、動けなくなり、脳が「早く逃げなくては」という指令を出し、その結果、回りが良く見えるように瞳が広がり、肺に空気をたくさん送り込むために気管支が太くなり、血の巡りを速くするために血管が細くなる。このため、皮膚下にある血管も細くなり、顔が青白くなる。この状況を分かりやすく簡潔に説明するために、「血液が一拳に引いてしまったかのように」「死体のような」と比喩が使用される。この場合比喩指標があるため直喩となるが、「顔が青ざめる」のような表現を使えば換喩(メトニミー)¹²に分類される。

3.2. 比喩の特徴

前述したように「人間が恐怖に襲われた時の状態」など抽象的なものを説明したり、具象化することが比喩の第一の特徴¹³である。パソコンや水といった視覚で捉えられる実体のあるものであれば、話し手であっても聞き手であってもその物のイメージにずれは起こらない。しかし、抽象的なものを理解する時、イメージのずれは起こりやすい。したがって、抽象物を具象化し伝達することでその感覚のずれを解決する。第二の特徴として想像力の刺激がある。例えば、「恐怖は真綿で首をしめるようにじわじわと輪を縮めてくる」という文を「怖かった」と情報伝達のみし

⁹ 喩辞は比喩文の中のたとえる語であり、「ヴィーグル、媒体、イメージ」などと呼ばれる。

¹⁰ 類似点を探す「連想」という認知能力は比喩の世界を支える心理であり、異なる事物の類似点を探すことによって、物事を解釈、理解しようとする心理メカニズムのことである。したがって、文脈によって連想するのは、全ての人が同じとは限らず、類似性は文化や民族や時代や地域によって変動がありうる。

¹¹ 比喩指標「ようだ・よう」が文に含まれているもの。

¹² 換喩とはあるものとあるものとの隣接関係に基づいている。例えば、「長髪」で「長髪の人」を表し、「鍋」で「鍋の中身」を表すなど。「顔が青ざめる」は人間の血管や筋肉の動きを顔色や表情などで表現しているため「結果—原因」を表す換喩に分類される。

¹³ 中村(1977)『比喩表現の理論と分類』秀英出版, p21~24で、比喩の表現方法上の特徴として重要と思われるもの三つを指摘している。

てしまえば、想像力はかきたてられない。言語作品の中で、作家は比喩を使い読者にイメージの形成面に対する働きかけをし、刺激を与えている。第三の特徴は、直接表現を避け、間接的に表現することである。例えば、口にするのをためらってしまう物事「死ぬ」という言葉を、「死」を暗示する言葉に変え用いて、「息を引き取る」「人生の幕を閉じる」などの表現を代わりに使う。その他にも「化粧室」「用を足す」なども同様といえる。比喩は文章を彩るために使われると考えられているが、それだけではなく、私たちの日常の言語生活の中にいつでも存在し、私たちのコミュニケーション理解を助けている。

3.3. 言語学から見た比喩

本研究では比喩を言語学の立場から行うため、ここで言語学で研究されている比喩について述べる。比喩表現は弁論術や修辞の技術として重要であり、文体論などにおいて文学研究の対象とされてきた。一般言語学においては、意味論の中で扱われてはいたが、次第に意味内容より文法理論を構築しようという学問的潮流に流され、比喩表現は言語学の主流からはずされる傾向にあった¹⁴。しかし、1980年代からアメリカで展開し始めた「認知意味論」¹⁵という言語分野において、比喩研究は大きく変わっていくことになる。

1980年に刊行した『Metaphors We Live By』の著者レイコフが、生活に根付いた比喩を発見したことによって言語学界に衝撃がはしり、今までの比喩の見方が大きく変わっていくこととなった。彼は大胆にも人間の思考過程の大部分が隠喩（メタファー）によって成り立っていると述べた¹⁶。今まで比喩とは考えられていなかった日常言語にも比喩が潜んでいると述べ、その言葉の奥に潜んでいるものを「概念メタファー」と提唱した。「概念メタファー」とは、説明したい内容を、身近で具体的経験の豊富な知識領域に照らし合わせて理解し言語化する認知能力である。抽象的で触ったり見たりできないような現象や概念を、何とか理解したい、伝えたいという欲求を満たすための手段が概念メタファーといえる。

¹⁴ 赤羽研三（1998）『言語と意味を考える—隠喩とイメージ—』夏目書房，p21

¹⁵ 「認知意味論」または「認知言語学」という枠組みで言語を分析しようとする場合の「認知」とは、「人間が世界をどのように把握しているか」という主体としての人間の働きを意味する。

¹⁶ 野内良三（2000）『レトリックと認識』日本放送出版協会，p85

認知言語学の隠喩理論でよく例に挙げられるのは、「時は金なり」という概念メタファーである。これは「時間」という抽象的概念領域を「お金」という具体的経験による知識領域で把握するという思考パターンである。私たちは「時間」を「お金」のように重要なものだと捉えているのである。具体的な例を挙げると、「時間を浪費する」や「時間を割り当てる」を「お金を浪費する」や「お金を割り当てる」と置き換えることができる。しかし、お金の領域がすべて時間の領域にあてはまるわけではない。「時間を短縮する」を「お金を短縮する」とは言えず、また「お金を返す」を「時間を返す」と置き換えができない。このように概念メタファーは被喩辞と喩辞の言い換えが必ずできるのではなく、非常に部分的であることも理解していなければならない。

IV. 恐怖

4.1. 恐怖の定義

恐怖とはある対象を恐ろしく感じる人間の感情の一つであり、主体が自分の身の危険を感じたときに恐怖が発生する。外部からのさまざまな攻撃に対して、受ける側の力が弱ければ恐怖に支配されてしまう。その恐怖の対象となるものは必ずしも攻撃的であったり、力の差があるわけではなく、主体の経験に基づいて恐怖の感情を想像によって生み出す場合もある。恐怖は実際に危険に脅かされて感じる恐怖と、経験によって生み出される不安や心配の意味を持つ恐怖がある。恐怖の類義語も多く「恐れる・怖がる・心配する」の動詞や「恐ろしい・怖い・不安・心配」など形容、形容動詞がある¹⁷。その他には慣用句で、「肝を冷やす」「気味が悪い」などが挙げられる。

表 1 辞書別恐怖の定義¹⁸

	恐怖	恐れる	恐ろしい	怖い	不安	心配
基本語用例辞典 文化庁		怖いと思う。恐ろしい。心配する。	怖い。危険だ。	おそろしい	安心できないこと。心配なこと。	心にかけて思い悩むこと。
新明解 三省堂	自分の身に危害が加えられる感じがして極度に不安になること。	恐ろしいと思う。	①大変なことが起こりそうで、避けたいと思う状態だ。こわい。 ②(将来が)心配される状態だ。	「恐ろしい」意の口語的表現。	どうなるかと心配して、落ち着かない様子	悪いことが起こりはしないか、どうなるか、という事を気に掛けること。気がかり。

¹⁷ 『類語大辞典』講談社，2002

¹⁸ 『外国人のための基本語用例辞典』（第3版）文化庁，1971／『新明解国語辞典』第2版 三省堂，1974／『大辞林』第二版 三省堂，1995／『岩波国語辞典』第3版 岩波書店，1979／『広辞苑』第五版 岩波書店，1998／『国語大辞典』新装版 小学館，1989／『日本語大辞典』講談社，1992／『現代形容詞用法辞典』東京堂出版，1991／『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店，1993／『国語慣用句大辞典』東京堂出版，1998／『類語大辞典』講談社，2002

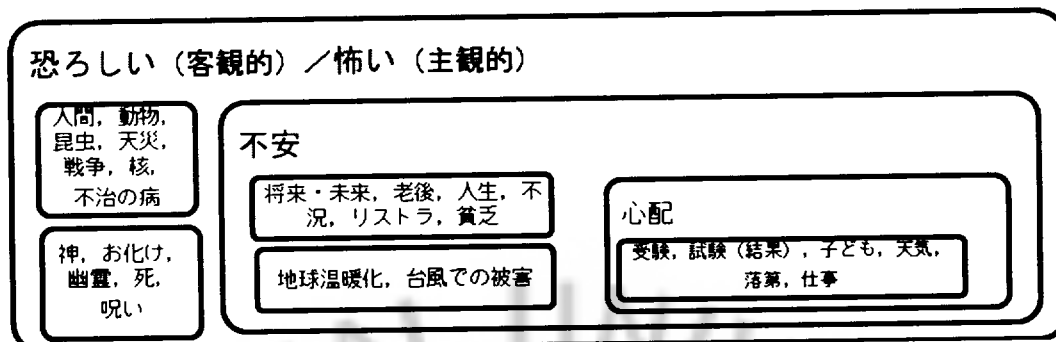
大辞林 三省堂	恐れること。恐れ。	①危害が及ぶことを心配してびくびくする。危害を及ぼすような人や物と接することを避けたがる。 ②良くないことが起きることを予想し、そうならなければよいが、と思う。危惧する。	①恐怖や畏敬の念を感じる。 ②(将来のことを心配して)避けたい。警戒しなければならぬ。	①危害を加えられそうで逃げ出したい感じだ。自分に危険なことが起こりそうで身がすくむ思いだ。 ②悪い結果が予想されて不安だ。先行きが心配で避けたい。	①気がかりなこと。心配なこと。これから起こる事態に対する恐れから、気持が落ち着かないこと。またそのさま。	①何か起きはしないかと、気にかけること。不安がること。気がかり。
岩波	恐れること。恐ろしい感じ。	①かなわないと思ってこわがる。 ②悪い結果になるのではないかと心配する。 ③敬いの心が生じて、かしこまる。	怖い。	恐ろしい。	気がかりな心の状態。安心できないさま。	①思いわずらうこと。気がかり。
広辞苑 岩波	恐ろしく感ずること。またその感じ。	①相手の力におされて、心が弱くなる。かなわないと思っこわがる。 ②悪いことが起こるのではないかと気づかう。 ③うやまって近づかない。恐れ多く思う。	(対象が自分に危害を及ぼしそうで、また不気味で)こわい。	①おそろしい。悪い結果が予想され、近寄りたくない。	安心のできないこと。気がかりなさま。心配。	心にかけて思いわずらうこと。また不安に思うこと。気がかり。
国語大辞典 小学館	恐れおじること。恐ろしく感ずること。またその感じ。	①恐怖を感じる。身に危険を感じたりびくびくする。心がひるむ。 ②将来のことを心配する。何か悪いことが起こるのではないかと気づかう。あやぶむ。	身に危険が感じられて、不気味である、不安である。こわい、おっかない。	①強い相手や危害を加えられそうなもの、正体がわからないもの、危険な場所などに対して、身をしりぞけたい感じである。身に危険が感じられて不気味である。おそろしい。	①気がかりで落ち着かないこと。	①心づかい。②不安がること。
日本語大辞典 講談社	おそれること。怖がること。		①こわい、おっかない②心配だ。気づかれる。	恐ろしい。	①気がかりなこと、さま。心配。	①気にかけて思いわずらうこと、さま。気がかり。
形容詞辞典 東京堂			①恐怖や不安を感じる様子を表す。	①恐怖や不安を感じる恐怖を表す。 ②不安や危惧を表す。		
動詞辞典 大修館		①恐いと感じる。 ②心配する。 ③神・天などを敬う。				①物事が悪い方向に向かうのではないかと不安に思う。

慣用句大辞典 東京堂	①恐縮する。どういふことかと気づかう。あやぶむ。②神威、前兆・将来、人格などに恐れ慄む。何が起るかと怪ぶる。おじる。					
類語大辞典 講談社	ぞっとするようなおそろしさ。	自分に危害を及ぼすものや、予想される悪い結果を、避けられればよいがと、ひどく不安にかられる。	自分に害を加えるような気がしたり、事態がひどく悪くなるのが心配だったりして、避けたほうがよいと判断される様子。	自分に害が及ぶかもしれないので、近づきたくないと思う様子。	悪いことが起こるのではないかと気になって落ち着かない様子。	悪い状態になるのではないかと気にすること。

恐怖を表す言葉で一般に使われるものは「恐ろしい」と「怖い」である。「恐ろしい」と「怖い」は大抵、意識して区別されてはいないが、『現代形容詞用法辞典』と『大辞林』に詳しい説明があるので紹介する。「恐ろしい」は「怖い」より程度が高く、自分の身を押しつぶすほどの強度の力や意志が感じられる場合に用いられ、恐怖や畏怖の念をいなくさまを客観的に表現する。「怖い」は、危険が感じられて、おびえる心情を主観的に表す語であり、口語的でもある。また、「恐ろしい」は対象のあらゆる状態について抽象的・普遍的に用いる傾向があるため、あるものの特定の状況について選択的に恐怖を表す場合には、「恐ろしい」ではなく、「怖い」が用いられる。例えば、<ハブは恐ろしい動物だ。>はハブの全体的状況を述べているため「恐ろしい」を使うことに不自然さはないが、<飛行機はときどき落ちるから怖い。>という飛行機のある一つの面を述べる場合は、「怖い」を使うのが好ましく、ここで「恐ろしい」を使うのは適していないということである。

恐怖の定義を図で表すと図1のようになる。恐怖の感情には「恐ろしい・怖い」があり、その中に「不安」の感情が含まれている。目の恐怖とは逆に未来への恐怖である。そして不安の中には「心配」の感情が含まれる。不安より心配の方が程度が低く命の危険を感じるまでではなく、漠然とした「何かあったら、うまくいかなかったら……」ということを表す。

図 1 恐怖



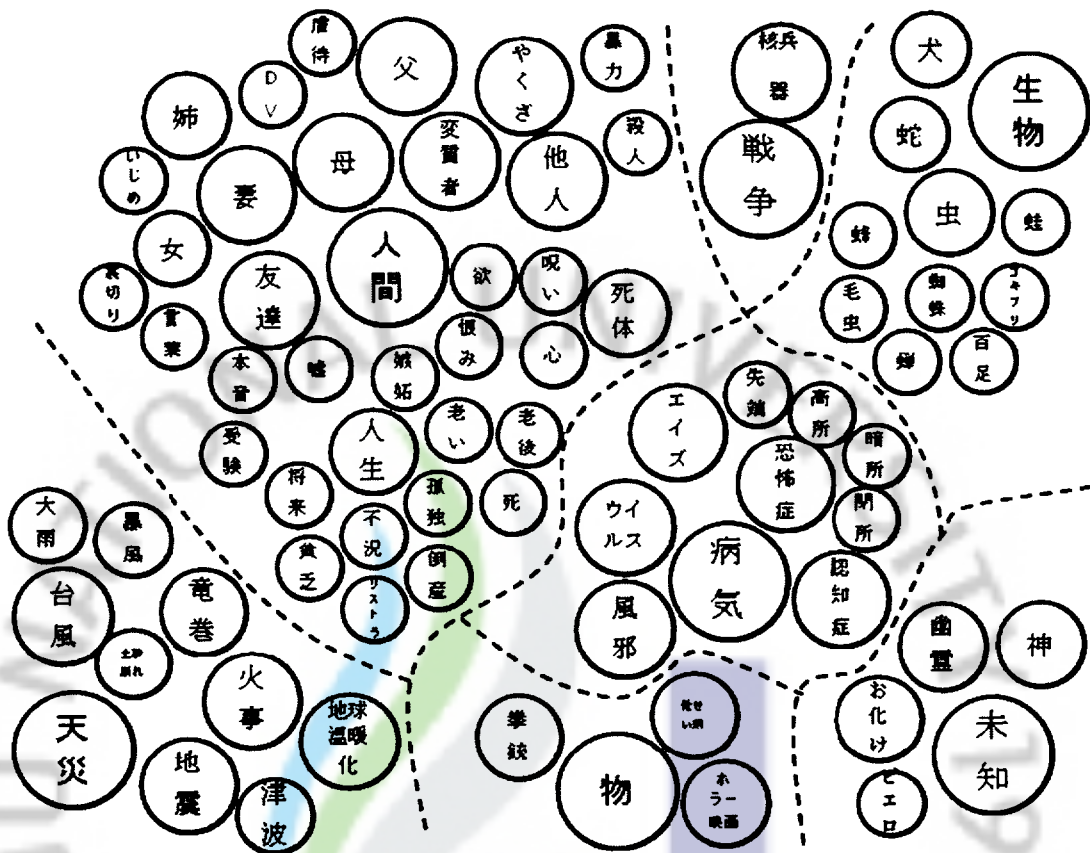
4.2. 恐怖を感じるもの

恐怖の対象は、子供から大人になるにつれて変化し、個人差もある。子供は迷信などを信じて恐れたり、知識や経験の少なさから恐れるものが大人より多くなる。例えば子どもはお化けを恐れるが、大人になるにつれて恐れなくなる。個人の場合はその各々の経験によって全ての物が恐怖の対象になるため特定することはできない。また、男女の差もある。女性は男性より昆虫や生き物が怖いかもしれないし、男性はお金の負担、仕事の責任などからリストラなどが恐ろしいかもしれない。そして時代の差もある。戦争を知らない現代の若者は戦争が恐ろしいとは考えず、逆に株が怖いと言うかもしれない。それぞれ年代、性別、時代によっても恐怖の対象は違う。

図2はインターネットサイト¹⁹の「あなたの怖いものは？」という質問から取り出した恐怖を感じるものを人間、天災、病気、未知のもの、生物、物、そして戦争と大きく分け、それぞれに関連したものを周りに散りばめた。

¹⁹ 知恵袋http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1329302018 回答数548名

図 2 恐怖を感じるもの星図²⁰



多くの人々は人間が怖いと答えた。人間の項目には家族から友達そして他人など人間そのもの以外に、人間の欲望や嫉妬、生活する上での不安なども含めた。次に目立ったのは生物の項目の昆虫で、身近にいる虫が「怖い」対象となっていることがわかる。次は天災で、地震や台風という意見が見られた。地震によって起こる火事や津波の二次災害、台風による大雨や暴風、土砂崩れの被害などがあげられた。病気では最悪の場合死に至るものが挙げられ、精神的なものでは恐怖症とされるものも含まれる。未知の項目は、存在がはっきりしないものを入れた。

次に、国別にも違いがあるのかを確認するため、英語、韓国語、中国語、日本語の辞書から恐怖の対象となっているものを抜き出し表にまとめた。下記の表2は日本語以外は1種類の辞書からのみであり、辞書の例文はいつの年代の文献からなのかが分からないので、対象となるものに時代の差が出ていること、また恐ろしい意

²⁰ 林大の「星図になぞらえた語彙表」を参考に作成。[秋元(2002)『語彙』p23]

味の指す語に程度の差があることを念頭に置き、対象となるものを見ていく。

日本の場合自然（雷・地震）の恐ろしさを感じていることが見て取れるが、他の国はそうではない。日本が地震大国であるという特徴が挙げられる。アメリカは戦争が身近で銃社会であるため治安が悪いことが想像できる。韓国にだけ現れる「猛獣」は日本の「山の神」のように古い文献からだとも推測でき、現代人の恐怖を覚える対象にあてはまらない。中国は人間関係から戦争まで幅広い。これは「怖い」を表す類義語に程度があるからである。例文は多くはないが、言語別に見ても恐怖の対象となるものは様々であることが明らかである。

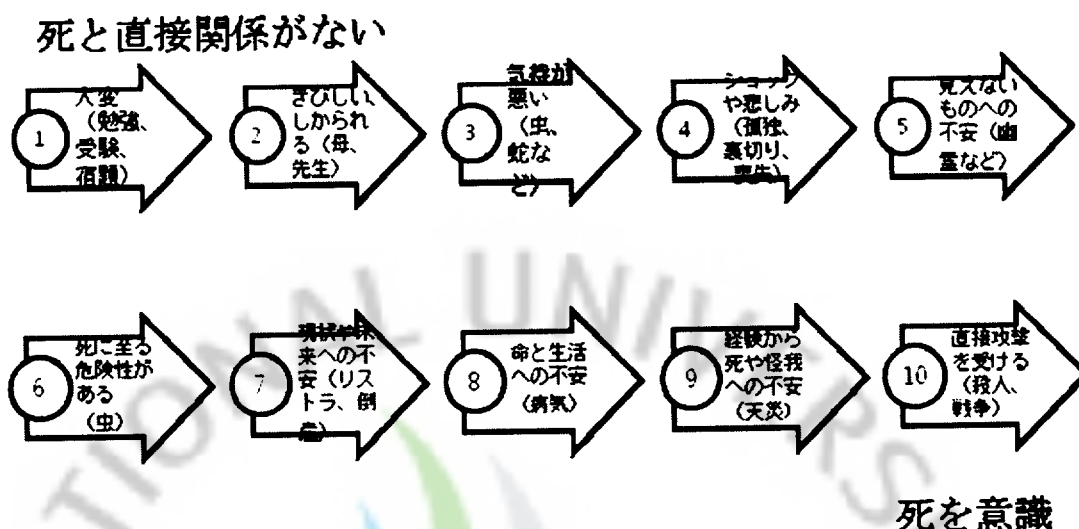
表 2 言語別恐怖を覚える対象

辞書と類義語	例文	その他例文から抜き出した対象
英語: Fear, Terror, Horror, fright 『Longman Dictionary of American English』	I have a <u>fear</u> of heights. The country suffered a reign of <u>terror</u> and faced near anarchy. The neighbors watched <u>in horror</u> as the fire swept through the trailer where the children were sleeping.	・高所 ・死 ・政治 ・人 ・戦争 ・帽子・国の情勢 ・遅れる ・安全 ・失敗 ・鉄砲を持っている ・子供の安全 ・交通事故 ・殴る ・戦争
韓国語: 공포, 무섭다, 두렵다, 두려워하다, 겁나다 『나라말사전』 YBMSi-sa	죽음이 <u>두렵다</u> . 무서운 호랑이. 불을 <u>겁나다</u> . 어둠을 <u>두려워하다</u> .	・虎 ・火 ・暗がり ・猛獣 ・一人で夜道を歩く ・車が多い道 ・声 ・顔 ・失敗
中国語: 恐惧kongju, 畏惧weiju, 惶恐huangkong, 怕pa, 害怕haipa, 『中日辞典』	悬崖绝壁使人 <u>恐惧</u> . 我怕老师说我不 <u>畏</u> 强敌.	・絶壁 ・困難 ・責任を取る ・先生にしかられる ・一人で暗い夜道を歩く ・テロ ・戦争 ・強敵
日本語: 恐/怖い、恐ろしい 『広辞苑』『大辞林』	雷が <u>怖い</u> 。株が <u>怖い</u> 。夜道は <u>恐ろしい</u> 。 <u>恐ろしい</u> 顔でにらむ。	・雷 ・株 ・相場 ・顔 ・山の神 ・地震 ・夜道

4.3. 恐怖の程度

恐怖の程度は、直前の命の危険や災害による被害に対する不安、そして、まだ見ぬ未来を心配し、そして身近にいる小さい虫などを気味悪がるなど、とても幅広い。図3は「あなたの怖いものは」の質問から出された返答を元に恐怖の種類を分析し、10段階に分けたもので、①が恐怖の程度が一番低く、⑩が程度が一番高いものとした。

図 3 恐怖の程度



①から⑤は死と直接関係のない恐怖で、⑥から⑩は死を意識した恐怖とした。死を中心と考えたのは、生きている人間の一番の恐怖といえは死ぬことであり、死に直面する瞬間が最大の恐怖だと考えたからである。直接死に関係がないものは、①の「受験が怖い」など勉強するのが大変、失敗したらどうしようという不安、②は「母が怖い」など恐怖を感じるほど厳しいの意味である。③は「ゴキブリが怖い」など見ていて不快という感情を表している。④は「本音が怖い」など人の嘘や裏切りに対しショックを受けるのが嫌だという感情である。⑤は「幽霊が怖い」など見えないものへの不安を表している。⑥は「むかでが怖い」など刺されたら命に関わる危険性があるということ。⑦は「将来が怖い」など、自分の将来や未来にたいする漠然とした不安や、リストラなどで職を失い生きていけなくなるのではないかと不安を表している。⑧は「病気が怖い」など不治の病や、身体障害者になり命や生活がおびやかされる場合である。⑨は「地震が怖い」など自然界に起きる災害から命の危険を感じている場合である。⑩は「殺される」「死ぬ」という感情である。

4.4. 調査資料の恐怖の種類と程度

研究対象の小説²¹では、人間の恐ろしさが多く描かれている。また、お化けや幽霊に対する恐怖が次に多く、そして人間やお化けによつての死への恐怖が描かれているものもある。その他に、死と関連した死体、コレラ、地獄、殺人ナイフが上げられる。人間の欲望や嫉妬から人殺しへと転落する人間の恐ろしさも描かれている。人の経験から恐ろしさを引き出しているものに、雪・音がある。特別なものに、やくざとの取り引きや生きたまま人を解剖することなどが挙げられる。

研究対象にしたホラー小説も様々な恐怖が描かれており、恐怖の程度も様々である。そのため恐怖の程度を少しでも分かりやすくするために研究対象の小説（短編集は除く）の主人公が一番強い恐怖を感じているだろう場面の恐怖を図3の①から⑩の程度別に分けた。『リング』『黒い家』『パラサイト・イブ』『ぼっけえきょうてえ』の四つの作品は⑩に属し、『ジュリエット』は⑤、『夜市』『庵堂兄弟の聖職』は④、『姉飼』は②に属する。そして、小説別ではなく収集したすべての比喩を①から⑩の段階に当てはめたのが下記の〈状況別比喩〉である。①は疲労を表現、②は人間の雰囲気、③は死人の顔、④は友人の裏切りに対する不安、⑤は目に見えないものへの嫌な予感、⑥は持ったら殺人を犯してしまう怖さ、⑦は移植手術に対する怖さ、⑧妻に殺されるかもしれない恐ろしさ、⑨は目前に迫る死、⑩は目の前のナイフを持った女に殺されるかもしれないときの状況を表している。

〈状況別比喩〉

- | | |
|---|---|
| ① | 内臓が半分ばかりとられたような気分、身も心をズタズタに消耗していた。（『庵堂兄弟の聖職』 p298） |
| ② | 何より怖かったのは、古狐が化けているのではないかと感じさせるような圧迫感を漂わせた背広姿の人物だった。（『姉飼』 p30） |
| ③ | なんとも華やかな、なんとも馨しいおぞましさ。（「妹の島」 p121） |
| ④ | いずみの顔に恐怖が広がった。（『夜市』 p40） |
| ⑤ | （ボールを）取りに行こうとして一歩近づいたとたん、背筋を悪寒が走りぬけた。（『黒い家』 p82） |
| ⑥ | これほど凶悪で、しかも深い悲しみに満ちた刃物など見たこともない。（「飢えたナイフ」） |

²¹ 次の5章。調査資料で詳しく述べるが、ここで先に研究対象の恐怖の程度と状況別比喩を紹介する。

フ」 p131)

- ⑦ 死んだ人のものが自分の体の中に入る。それが急に実感を伴って襲ってきたのだ。
(『パラサイト・イブ』 p219)
- ⑧ 弘三はいきなり氷の柱を抱かされた。(「密告函」 p99)
- ⑨ 死の恐怖が冷静な判断力を奪い去ってしまったのだ。(『リング』 p279)
- ⑩ 浅倉の心臓が凍りついた。(『パラサイト・イブ』 p265)



V. 調査資料

普段の生活をする上で、比喩が身近にあり、また、概念というものを基盤に置き会話をしていることは確認できたが、では、文学作品に使われている言葉はどのようなのか。文学作品も日常言語も同じようなメタファー的思考を基盤にしているというのが認知言語学者らの主張である。文学作品の比喩と日常言語の比喩は思考メカニズムという観点からすれば本質的な違いはないかもしれないが、言語作品は、全てのことを言葉で表現することを求められるため、会話にはない比喩表現が多様に使われていると思われる。

5.1. 調査対象の選定

調査資料は日本の文学作品から選ぶことにした。文学作品といっても年代もジャンルも様々であるが、本論の主題となる恐怖の比喩を抜き出すためにはそれに見合った作品を選ばなくてはならないため、ホラー小説に焦点を当てた。辞書²²による「ホラー小説」の定義は、「幽霊などが登場して読者をぞくつとこわがらせるような物語」であり、「恐怖小説」とも呼ばれる。今まで「怪奇小説」「恐怖小説」等さまざまな名称で呼ばれていた小説が、「ホラー小説」と呼ばれるようになるのは1993年である。この時代は物語が解決可能性に向かう新本格ミステリーから物語が解決不可能性にむかうホラーへと人々の趣向が変わり始めていた。戦後最後の経済的狂乱だったバブル経済の崩壊が重なり、社会的な「解決不可能性」の重苦しい社会のなかで、ホラーは新しく生まれ変わる。²³今まではホラー・ジャンル限定の読み物であった小説が、だんだんと他の小説と混ざり合っていく。ホラー好きの読者だけでなく、多くの読者を虜にし、ジャパニーズホラーが誕生す

²² 『類義語大辞典』講談社、2002

²³ 高橋敏夫(2010)「プレカリアート文学とプロレタリア文学のあいだに――ホラー小説・『蟹工船』・雨宮処凛的転回」『国文学 解釈と鑑賞』4月号、至文堂、p27～p34

ることとなる。恐怖の対象として描かれるものは、幽霊や妖怪など超自然的なもの以外に、最新の科学知識を駆使したSFであったり、サイコな殺人鬼であったりする。ホラー小説のジャンルは様々で、コズミックホラー、サイコホラー、ゴシックホラー、モダンホラー、カルトホラー、スプラッタがある²⁴。

小説はホラーに限らず、読者の想像力を刺激するように書かれており、その読者の想像は情報量が足りない時に生まれるようである。恐怖は多くの場合想像力によって引き起こされるため、ホラー小説は読者の情報を低く設定し、想像力を膨らませるように書かれている。適度な刺激を与えながら、結論に至り最終的には安堵感が得られるようになっている。しかし、大抵私たちは活字を読んで、本当に怖い思いをすることは滅多にない。想像力がかき立てられ、作中人物にどれだけ感情移入して読んだとしても、読むことで嫌な気持ちになることはあるが、読者自身が恐怖に直結するわけではない。登場人物の身を案じたり、同情して涙を流す喜怒哀楽の感情と恐怖は別のものであるといえる。それは読者は危険から保護されており、本を閉じれば安心する環境にいるからである。このような状況で、読者に恐怖を覚えさせるために小説の作者たちは、技法を凝らし様々な表現を使っているため興味深い小説といえる。

ホラー小説の分野には、日本ホラー小説大賞というものがある。日本ホラー小説大賞とは、角川書店とフジテレビジョンが1994年に設立²⁵したもので、一般人の応募作品の中から対象を決定するものである。研究対象の作品として日本ホラー小説大賞の大賞に選ばれた作品を中心として選定することにした。選定の理由はまだ名の知られていない作家や一般人からの応募作品であるので作風などに偏りがなくと、大賞に選ばれた作品はそれぞれの作家のアイデアが多彩で、読者の想像力をかき立てる比喩が多く使われているのではないかと考えたためである。大賞は二年に一度のペースで出ており、作品別に挙げると、第二回大賞の『パラサイト・イ

²⁴ 「小説家をたのしくめざすリンク集」 <http://syouseituka.com/syouseitu10.html>, コズミックホラーは、宇宙と人間の関係をテーマとし、SFのジャンルの一分野である。サイコホラーは、人間の心理をテーマにし、残忍な殺人鬼などが登場する。ゴシックホラーは、古典ホラーとも呼ばれ18世紀から19世紀のイギリスの邸宅や古城が主な舞台となる。モダンホラーは現代社会を舞台にしている。カルトホラーは、怨霊などの恐ろしさが徹底的に描かれている。スプラッタは人体の損傷をテーマにしている。

²⁵ 恐怖を通して人間の闇と光を描こうとしている才能あふれる書き手のために設立。

ブ』²⁶は、人間にはかなわない存在が恐怖の対象となっている。第四回大賞の『黒い家』²⁷は、人間の欲望からくる恐ろしさを描いている。第六回大賞の『ぼっけえ、きょうてえ』²⁸は地方にある言い伝えが題材となり、禁を犯す人間の心理状態が描かれている。第八回大賞の『ジュリエット』²⁹は過去に縛られた人間の心の弱さについて、第十回大賞の『姉飼』³⁰は、「生きた女を串刺しにして飼い殺す」という異様な嗜好の男性の心情が描かれた作品である。第十二回の『夜市』³¹は、人間の欲望を描き、また第十五回の『庵堂三兄弟の聖職』³²では、それぞれ抱えている問題や悩みで苦しむ様子が描かれている。これら以外には、角川書店から出版されているそれぞれの時代に活躍している作家によって書かれたホラー傑作選³³を二冊選んだ。これらは音や雪、言葉、ナイフ、記憶などそれぞれをキーワードにし、それを恐怖の対象として書かれた作品である。映像化された作品からはJapanese Hollerの先駆けとなった『リング』³⁴を対象にした。すべての作品のコンセプトは「恐怖」であるが、様々な視点からみた恐怖が描かれている。

5.2. 比喩採集における問題点・範囲・基準

作品中から、比喩表現を探す目的で読んでいく場合、作品の内容に気をとられ、部分的な比喩表現や慣用的な比喩表現は見逃しやすい。しかし、内容に注目しなければ、比喩表現だとは気づきにくい。また、文学作品では、複雑で高度な比喩表現

²⁶ 瀬名秀明 (1995) 「人間の中にあるミトコンドリアに主体である人間が支配される」という内容。

²⁷ 貴志祐介 (1997) 「人を殺して保険金を受け取ろうとする保険金詐欺との戦い」の話。

²⁸ 岩井志摩子 (2002) その他二つの物語「あまぞわい」「依は利の如し」を含む。3作品は一貫して地方にある言い伝えを題材に「地獄に近づく」恐怖を描く。

²⁹ 伊島りすと (2003) 「過去に妻・母を火事によって亡くした苦悩を抱えた家族が死者が現れるという場所で暮らす」物語。

³⁰ 遠藤徹 (2006) 「姉という凶暴な女のペットを串刺しにして死ぬまで飼うことに魅せられた男」の物語り。その他2作品「キューブガール」「妹の島」を含む。

³¹ 恒川光太郎 (2008) 「夜のみ開かれる違う世界の市場に弟を売り、野球の才能を買った主人公が弟を取り戻しに行く」という内容。

³² 真藤順丈 (2008) 「死体を使って食器や装飾品を作る仕事の家業の兄弟3人のそれぞれの悩み」を描いた作品。

³³ 遠藤周作編 (1993) 『それぞれの夜』角川書店、村上龍編 (1993) 『魔法の水』角川書店

³⁴ 鈴木光司 (1991) 「呪いのビデオを見たものが次々と死に至るため、死に立ち向かうためビデオを解明していく」という内容。

が多い傾向があるので、比喩表現の把握も困難である。

このような困難な点を踏まえ、小説に登場する比喩表現を網羅するのではなく、個人的な基準をもうけ、判定する手段をとる。小説10冊の全ての比喩を採集するとなると多大な量になるため、主人公の感覚・感情表現から得られる比喩表現に絞り比喩を採集していく。そして、様々な場面が一つの物語を作っているが、本論のテーマが「恐怖」であるため比喩を採取する場面も主人公が恐怖や不安を感じている場面のみ限定する。例えば、〈手紙が山のように積まれている〉などの特に人物が恐怖を感じていない描写表現は採取しないが、〈やわらかく光の中に、そのナイフは身を横たえていた〉のように比喩表現だけを見るとただの描写のようであるが、恐怖心を持った描写であるので採取する。先行研究では恐怖の感情を表す慣用的な表現を扱ったもののみであるため、本論では慣用的な表現に限らず、恐怖の場面に現れる比喩をすべて採集していく。どの表現を比喩とするかしないのかを見極める場合、中村(1977)の分類法を参考にする。中村(1977)は比喩を三つに分類していて、一つは「指標比喩」いわば直喩のことである。二つ目は「結合比喩」で、これは異常な結合だと思われるもので隠喩に多く見られる。そして三つ目は「文脈比喩」と呼ばれるものだが、これは文全体が比喩になっているものを示す³⁵。

³⁵ 「まるで、よう」が文章に含まれるものが「指標比喩」。「結合比喩」の異常な結合とは、〈心が燃えている〉など燃えるはずのない心が燃えるという動詞と結合していることである。「文脈比喩」とは、その文章自体には何の異常さもなく、前後の文章を見ないと比喩だとは分からない文章のことである。例えば、〈商人はこちらを這いつくばらせ、頭を靴で踏みつけにするのを楽しんでいた〉実際はこの文章にある状況はまったくなく、商人は客が買いたくてたまらないものには大金を出すのを知っていて、異常な料金をふっかけてくるという意味である。(中村明『比喩表現の理論と分類』秀英出版, p174-p199)

VI. 調査結果の分類

6.1. 意味別分類

比喩表現は、ある二つの物事を連想によって結びつけることで成り立つものである。ある物の属性を表現するのは用言であるが、動的な性質を示すのは動詞であり、状態的な性質を表すのは形容詞である。比喩表現には名詞と名詞の置き換えだけでなく、名詞とある物事の動的な性質の結びつきであったり、名詞とある物事の状態的な性質との結びつきであったりする。私たちは類似性を導き出す時、対象となるものを様々な角度から見ているからである。ここでは、比喩の対象となっている二つの事物（被喩辞と喩辞）を名詞と名詞の置き換えはその名詞の意味でカテゴリー別に分類し、その他の比喩は表現別に分けた。

6.1.1. 体言の比喩表現

作品から得た比喩表現内で被喩辞と喩辞が名詞であり、カテゴリーの置き換えが見られるもの³⁶と、同カテゴリー内で名詞の置き換えが見られる³⁷比喩表現は延べ215例であった。これらの比喩表現から被喩辞と喩辞を取り出しそれぞれを意味別に分類した。取り出した被喩辞と喩辞をそれぞれ人間・動物（昆虫も含む）・植物・自然物・人工物・身体部位・知覚・抽象物・未知と大きく九つにカテゴリー分けすることができた。

- 人間： 何より怖かったのは、古狐が化けているのではないかと感じさせるような圧迫感を漂わせた背広姿の人物だった。『姉飼』p30
- 植物： 榎の幹の下からは曲がりくねった裸の根が幾本も顔を出し、からまり合っている。

³⁶ <彫刻のような子供>被喩辞が「子供」で人間のカテゴリーに属し、喩辞が「彫刻」で人工物のカテゴリーに属する。ここで人間から人工物へのカテゴリーの置き換えがおこっている。

³⁷ <子供のような女性>被喩辞が「女性」で人間のカテゴリーに属し、喩辞が「子供」で人間のカテゴリーに属する。ここでは同カテゴリー内で名詞の置き換えがおこっている。

『リング』P191

- 自然物: ふいに首筋に、鎌でそっと撫でられたような風が起こった。「依は件の如し」p187
- 人工物: まるで生き物のようにオイルは下水に向かって、這っていた。『リング』P21
- 身体部位: 若槻の心臓はどきんと跳ね上がった。『黒い家』P80
- 知覚: 体の中に湧き上がった迷信じみた恐怖と闘った。『黒い家』P319
- 抽象物: 異様なエピソードのひとつひとつが錆びた刃物みたいになって、久就の胸をぞりぞりと鈍く、抉った。『庵堂兄弟の聖職』p135

被喩辞と喩辞を取り出す際、直喩の場合両辞とも文章内に表れているため問題はない。しかし、喩辞の見られない隠喩の場合、文章から喩辞となるものが何かを探らなければならない。したがって根拠（類似性）となるものから喩辞を導きだした結果で分類することにした。例えば、＜サイレンのような甲高い悲鳴を上げていた＞は直喩であり文の中に被喩辞「悲鳴」と喩辞「サイレン」が見られる。「悲鳴」は知覚に属し、「サイレン」は人工物に属する。＜轟々と風が鳴っていた。耳のすぐ後ろで吠えていた＞の場合、被喩辞は「風」で自然物に属し、喩辞は文章中には見られない。しかし「吠えていた」が根拠となり、そこから喩辞を導き出し「吠える」ものは「動物」であると判断できる。したがってこの文章の被喩辞は「風」であり、喩辞は「動物」となる。このように分類した結果が表3である。

表3 被喩辞と喩辞のカテゴリ別分類

喩辞 被喩辞	人間	動物	植物	自然物	人工物	身体部位	知覚	抽象物	未知	合計
人間	3	3	0	3	6	1	1	0	1	18
動物	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
植物	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
自然物	17(4)	2	0	3	4	0	1	0	0	27
人工物	9(2)	5	0	0	0	1	0	0	2	17
身体部位	2(1)	1	0	2	20	2	0	0	0	27
知覚	48(29)	10	0	28	18	0	2	2	5	113
抽象物	6(4)	1	0	1	4	0	0	0	1	13
未知	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	87(35)	22	0	37	52	4	4	2	9	217

◆ 喩辞の「人間」の項目の () 内の数字は動物でも考えられる表現の数。◆ 喩辞³⁸被喩辞³⁹の詳細

動物と未知の物は喩えられていない。これは研究対象のストーリーの中には主題として出てこないからである。表3から言える特徴としては、自然物の多くは人間に喩えられていて、人工物のほとんども人間と動物に喩えられている。身体部位は人工物が大部分を占める。知覚は人間が一番多く、自然物、人工物と続く。抽象物は例文が少ないが、人間が一番多く、次に人工物が多い。

表 4 使用率

被喩辞	使用率	喩辞	使用率
人間	8.2	人間	40.0
動物	0	動物	10.1
植物	0.9	植物	0
自然物	12.4	自然物	17.0
人工物	7.8	人工物	23.9
身体部位	12.4	身体部位	1.8
知覚	52.0	知覚	1.8
抽象物	5.9	抽象物	0.9
未知	0	未知	4.1

使用率は被喩辞としては知覚が半数以上を占める。これは例文の採集条件として、登場人物が恐怖を感じている状況のみと限定したため、人物の感覚や感情に関する比喩表現が多くなることは当然のことである。喩辞として最も多く使用されているものは、人間である。次に人工物、自然物と続く。生命を持ったものと考えれば、人間と動物で半数を占める。植物は喩辞として現れない。これは人は恐怖を感じている時、植物に喩えることはしないという一つの特徴としてあげることができる。恐怖を感じている場面では植物の持つ概念の中に感覚主体に影響を与えそうなものがないのか、または植物に喩えても読み手が理解し難く、また想像もし難いという

³⁸ 人間：人／植物：椿・草木／自然物：光・月光・雲・闇・影・風・空気・湿気・大気・雪・雷光・闇黒／人工物：オイル・石・井戸・刃物・道路・車・エレベータ・シミ／身体部位：目（目つき、目線）・血・アドレナリン・心臓・胸・頭・体・顔／知覚：におい・音・声・悲鳴・不安・気分・焦燥感・緊張感・胸騒ぎ・嫌悪感・感覚・痛み・震え・悪寒・記憶・恐怖／抽象物：眠り・死・言葉・出来事・事実・現実感・時間・エピソード／未知：幽霊・怪物・真っ黒な何か・悪夢

³⁹ 人間：人・敵／動物：蛇・虫・襲うもの・蜘蛛の糸・なめくじ・鳥／自然物：気体・液体・霧・梅雨空・炎・波・氷・粒子・伝染病・マラリア／人工物：ひも・刃物・フィルム・彫像・石・武器・障害物・楽器・機械・ステッカー・物体・容器／身体部位：耳・死体・死人の顔・体／知覚：声・音・感覚／抽象物：憎悪の塊・影法師／未知：悪霊・怪物・幽霊

理由が挙げられる。しかし、私が調べた資料になかっただけであって、一般的に大きな木などから恐怖を感じる人もいることから他の小説から例文が出てくる可能性はありうる。

6.1.2. 人物の状態の表現

被喩辞と喩辞の関係が体言の置き換えで判断できないものをここに記述した。ある状態を比喩で表現してるものであるので、状態別に分類した。

1) 体温低下

人物の恐怖は体温低下によって表現される。恐怖による身体部位の生理的変化であり、これはメトミニーに分類される。「心臓が凍る」や「氷を背負わされる」など実際に起こっていない状態の表現は隠喩的表現といえる。

- (1) 若槻は全身の血液が凍りつくような感覚を味わっていた。(『黒い家』p330)
- (2) 若槻は印鑑を取り上げかけて凍り付いた。(『黒い家』p348)
- (3) 顔は火照るのに首から下は氷室に入れられたように冷えた。心臓まで凍りつきかけた時
(「密告函」p92)
- (4) 弘三はいきなり氷の柱を抱かされた。(「密告函」p99)
- (5) ふいにシズは氷を背負わされた。(「依って件の如し」p164)
- (6) 浅倉の心臓が凍りついた。(『パラサイト・イブ』p265)

2) 不能 (身体機能)

恐怖は身体機能不能の状態でも表現される。(7)(8)では「行動不能」を「麻痺したように」や「足が床に張り付いて」など動けない状況を比喩で表現している。(9)(10)は「聴覚不能」を表現している。聞こえないことを「みんなどこかへいつてしまった」、そして「祭りの賑わいは抜けていった」と祭りはにぎやかなのに、

その声や音も聞こえなくなると表現している。(11)では「息ができない」様子を「水底に沈められたかのように」と表現している。

- (7) 窓口担当の女子職員たちは全員麻痺したように動かない。(『黒い家』p388)
- (8) 逃げ出したかった。だが足が床に張り付いてしまっている。(『パラサイト・イブ』p258)
- (9) 聞こえない。人間も機械も空気もみんなどこかへいってしまった。病院中の人間が消えたようだった。(『パラサイト・イブ』p359)
- (10) シズの後頭部から、祭りの賑わいは抜けていった。(『依って件の如し』p198)
- (11) 水底に沈められたかのように、耳鳴りがして息が詰まる。(『あまぞわい』p130)

3) 身体落下

(12)～(13)は恐ろしいという感情や感覚を体の落下で表現している。(12)では「地獄」(13)では「死地」(14)では「底なしの闇」に落ちていくような状況であることを述べている。

- (12) シズは右目で地獄(絵)を見ていた。……シズの後頭部から、祭りの賑わいは抜けていった。あるのは足元にのみり込む地獄だ。(『依って件の如し』p198)
- (13) 虎口を脱したはずなのに、彼はまるで死地に陥ったかのような感覚に襲われていた。(『黒い家』p358)
- (14) 自分の心臓が底なしの闇に落ちて消えてゆくような感覚を払うことができなかった。(『パラサイト・イブ』p293)

4) その他の状態

1) では体温低下の状態を「氷」や「凍る」という語を用いて表現していて、2) では身体機能不能の状態を書き手の文彩技術を用いてまったく違った表現で表している。しかし、4) では状態は書かれているので、その状態に詳しく説明を加えた比喻といえる。(15) では恐怖のあまり青ざめる様子を「全身の血を絞り出され

て」という表現を加え、顔の青白さを想像しやすくしている。(16)では驚いた様子を「毒虫で刺されたよう」と表現している。虫ではなく毒虫としていることから痛さや恐ろしさが混ざった状態であることがイメージできる。(17)の場合も、「心臓がドキドキする」程度が「締め付けられる」によって表現されている。

(15) どこも切られていないのに、シズは全身の血を絞り出されて青ざめていた。(「依って件の如し」p200)

(16) ふいに田圃の中の利吉が立ち上がってこっちを向いた。シズは毒虫で刺されたようにびくりとする。(「依って件の如し」p163)

(17) わけもなく心臓が締め付けられるみたいにドキドキしてくる。(『ジュリエット』p169)

6.2. 感覚別分類と考察

前述した基準をもとに採集した比喩を分類するにあたって、五感に内臓感覚を入れた六感、そしてそれと共に生まれる精神活動に分類する。まずは五感を視覚、聴覚、嗅覚に分け、触覚は皮膚感覚の一つとした。味覚の比喩表現は採集した中に見られなかったので調査対象外にした。視覚は目や目線、そして視覚でとらえる全ての物を対象にし描写の項目を含めた。視覚で捉えられ、それを描写したものを人物と人工物、自然物に分類し考察する。聴覚は、音と声、沈黙・静寂の三つに分類した。皮膚感覚は触覚、冷、痛と3つに分類した。嗅覚は匂い(臭い)の表現のみである。内臓感覚とは臓器の状態に伴う感覚のことで、悪心、欲求、圧迫感、痛みとして現れる。内臓感覚には心臓と感覚器官の表現が見られた。精神活動は記憶や考えは思考、気分や気持ちは心と二つに分類した。

比喩は喩えられる語と喩える語の類似性によって結びついているが、その類似性とは一つではなく、状況や人、国によって変わる。しかし、変わらない概念もある。変わらない概念とはすでに私たちの深層心理の中で固定されたものとなっていて、慣用化されているものが多い。慣用化されている比喩も含めここで考察していくが、特に新しい発見はないと思われる。状況によって変化する独特の比喩の類似性を明

らかにする際には、文脈であったり、対象の事物と共起している動詞に注目して考察していく。

6.2.1. 視覚

見るという行為は知覚する主体の目によって外部世界の情報や刺激を捉えたり入れたり、または感覚器官の目の網膜を通して情報や刺激が入ってくる行為である。

6.2.1.1. 目

a) 目は独立したもの

- (18) 落ち着きなく想像をあちこちに飛ばし、浅川はどうしても壁の一点に目を据えることができなかった。(『リング』p74,75)
- (19) 産毛が逆立つような気がした。……浅倉は辺りを見渡した。……研究室のあちこちに目を走らせた。(『パラサイト・イブ』p257)
- (20) 背筋を悪寒が走り抜けた。いつのまにか、彼の目は突き当たりの何もない場所に釘付けになっていた。……向こうに何かがいるような気がしたのだ。(『黒い家』p82)
- (21) 足が動かないのではなく、私の目が、彼らをとらえたまま動こうとしないのです。(『桔梗』p37)

a) の4つの例文は目を物や生き物に喩えることにより、自分の思い通りにならない状況を述べているため、身体の一部ではなく、感覚主体から離れた独立したものとした。(18)から(21)は一般に慣用的に使われる表現だが、目を目的語としそれに結合する「据える」「走る」「釘付けになる」「捉える」は異常な結合と判断し、比喩とした⁴⁰。

b) 目は容器である

- (22) 扉に手が届く。息が詰まる。……取っ手を引く。中身が網膜に飛び込んでくる。利明は悲鳴を上げた。(『パラサイト・イブ』p338)

⁴⁰ 「据える」は物を動かないように置くという意味であり、「釘付け」は釘で打ちつけて物を動かないようにすることであり、目を物体と置き換えている。「走らせる」「捉える」は目を生物に置き換えている。

(22)の概念は「情報を受け入れる容器」であると考えられ換喩に分類されている一般的な概念である。見るという行為は情報や刺激が目に入ってくると捉えられているからである。b)概念は主体がどのような精神状態でも変わらない概念であるため、恐怖の感情とは関係がない。

6.2.1.2. 視線

a) 視線はひもである

(23) 利明は顔を背けようとしたが視線が絡み付いてほどけなかった。(『パラサイト・イブ』p340)

視線とは目と見ている対象を結ぶ線であり、その対象と線で結ばれているというイメージがある。(23)では「絡み付いて」「ほどけなかった」とひもなど細長い線状のもと共起する動詞と共に使用される。

b) 視線は武器である

(24) 静五郎の嫁の突き刺す目つきが思い出され、背筋が冷えた。(「密告函」p57)

(24)は視線が「武器」に喩えられている。これは知覚する主体に何らかの不快感を与える視線であり、それによって傷つけられていることを意味する。

6.2.1.3. 描写

描写されている対象は人物やその表情と行動・様子、物体、自然物である。ここでは描写されている対象を状態別に分類して考察する。

a) 人物—動かないもの

(25) よろめきながらベッドに横たわり……彫像のように動かない子供(死体)の姿……。寝返りを打って、頭から必死にその映像を追い払おうとする。(『黒い家』p104)

(26) シズは障子紙より白くなった顔で、死体のように硬直していたからだ。(「依って件の如し」p178)

a)は人物を「彫像」や「死体」に喩えて硬直状態であることを表現している。ここで、「彫刻」や「死体」の持っているイメージを考えることにより、その対象となるものの様子が硬直の意味だけでなく多義的にイメージできる。例えば「彫刻」は冷たい、またある人は怖いと連想するかもしれない。「死体」は冷たい、青白いというイメージも浮かぶ。

b) 人物—身体部位の生理的変化

- (27) 誰かが……フルーツを取れば兄、仁一の生首がぬっと現れる。……あからさまな恐怖が刻み込まれた顔だった。かっと思開かれた目。叫びのかたちで静止した口。(『妹の島』p121)
- (28) 覗き窓から顔をあげたシズは、全身の血が抜けて蠟のように白くなった。亡母の堕ちた地獄がどこかはっきりわかったからだ。(『依って件の如し』p199)
- (29) どこも切られていないのに、シズは全身の血を絞り出されて青ざめていた。(『依って件の如し』p200)

(27)は表情に恐怖心が現れた状態である。(28)と(29)は恐怖によって起こる体の状態、血管が細くなることによって起こる症状であるため、結果—原因のメトニミーに分類される。

c) 人物—恐ろしいもの (被喩辞=喩辞)

- (30) 利明はぞっとした。それは今にも拷問に処されようという囚人に女王が見せる、蔑んだ慈悲の笑みだった。(『パラサイト・イブ』p323)
- (31) 何より怖かったのは、古狐が化けているのでないかと感じさせるような迫力を漂わせた背広姿の人物だった。この人はたぶんほんとは人間じゃないとぼくは思った。(『姉飼』p30)
- (32) 闇にも濃度がある。明るい順に空、……最も濃いのが人だ。松明を掲げて提灯を下げていても不吉な影法師だ。……それは、我が家にもいる(妻)。(『密告函』p91)

c)では、比喩の特徴の一つが挙げられる。被喩辞となる「笑み」「背広姿の人物」「妻」を私たちの想像上のものに喩えていることである。多用される比喩はその逆で、分かりにくいものを分かりやすいものに喩えるのが普通である。しかしc)

では喩辞が「囚人に女王が見せる笑み」であったり「古狐/憎悪の塊」「影法師」である。比喩は実際読者が知らないものに喩えられていたとしても、想像や連想することによって理解ができる。比喩の理解に想像が大きく関わっていることがここで判明する。喩辞から連想で導きだせるのは何者か分からない人物の圧迫感であったり、得たいの知れない恐ろしさである。

d) 形容詞と副詞との結合

(33) もうひとりの看護婦が涎を垂らしながら両手で顔を掻きむしっていた。その目は焦点が定まっておらずどろりとしている。(『パラサイト・イブ』p389)

(34) 「兄さん、仁一兄さん！」仁三郎はそう叫んだ……なんとも華やかな、なんとも馨^{かぐわ}しいおぞましさ。……フルーツが盛り付けてあったのだ。生首と一緒に。(「妹の島」p121)

(35) 正太郎が四万木の語りを止めた。表情はどんより濁り、不愉快そうに口元を歪めている。(『庵堂兄弟の聖職』p120)

d)は、通常は結びつかない形容詞や副詞と名詞が結合した表現のことである。(33)は<どろりとしている>と液体の状態を表す副詞が目を描写するのに使われている。(34)は<馨しい>の香りがよいという形容詞に<おぞましさ>が組み合わせられている。(35)での<どんより濁る>とは空気などが不透明な様子を表したり、目に生気がない様子にも使われることから、目の様子が表情全体をそのように見せているともいえる。目の様子から顔の表情を表すのであれば、「部分—全体」の換喩に分類される。d)のように通常は結びつかない語と語を結合することで、読者の想像力をさらにかき立てる役割をしていると考えられる。

e) 行動・様子（硬直状態）

(36) 居合わせた男たちは皆、毛穴という毛穴からセメントを流し込まれたみたいに硬直していた。(『庵堂兄弟の聖職』p140)

(37) 美也子は……ずっと何も言わない。その表情は硬い。窓から吹きこむ寒風よりも、内側から冷たく引きつってるみたいに、硬い。(『庵堂兄弟の聖職』p158)

(38) 窓口担当の女子職員たちは全員麻痺したように動かない。(『黒い家』p388)

(39) 全ての聴衆が利明に驚きの視線を向け、そのまま髪の毛の先まで石のように固まった。

(『パラサイト・イブ』p325)

(40) ココは……ノコギリをルカの頭上にかざした。ベッドの端に腰をおろしたまま、そこに釘付け

にされてしまったみたいに動けない。(『ジュリエット』p278)

e)は全て直喩である。恐怖によって動けなくなってしまった状態を表現している。人物を動かないものに喩えたa)とは違い、硬直状態を何かをしたあとの結果の状態として表現している。人は恐怖を感じると体の筋肉が固くなるのを「石・セメント」に置き換えたり、動かない様子を「麻痺」や「釘付け」と違った表現を使い具体的に説明していることがわかる。

f) 行動・様子一状態異常

(41) 叫ぼうとして、浅川は声が出なかった。……喉の奥からかすれた声漏れるばかりで、溺れ

かけた子供のように顔を上げた。(『リング』p283)

(42) 「ルカ」女のひとが囁く声が出て、ルカはいきなり電流を通されたようにめちやくちやに手を振り回した。裸のまま浴室の外に飛び出した。(『ジュリエット』p174)

(43) ルカはシャワー室の一件以来、羽をむしられた鳥のように敏感になっていて、ちょっとした刺激にもすぐに過剰反応するようになってしまった。(『ジュリエット』p234)

(44) 重い眠りから覚めた夏夜は……悟った。仰向けに寝ている背中に、違和感があるのだ。叫び声を上げかけて、辛うじて抑えた。ゆっくりと傷口の絆創膏を剥がすように、寝床の上に体を起した。子猫は三匹とも、……夏代の背に押し潰されて……死んでいた。(「埋葬」p252)

(45) いきなり闇の中で何かが動いた。冷蔵庫の唸りなどとは違う、不規則で生々しい音だった。枕から顔をあげて息を殺した。(「音」p93)

f)は、(41)～(44)までは直喩で、(45)は慣用的に使用されている。(41)(42)(43)は恐怖のため我を忘れてパニックに陥っている様子を表現している。(44)(45)は恐怖よりも不安に近い状態である。恐怖を感じる対象がはっきりしない状態において、その主体の行動は抑えられることがわかる。

次は、物体の描写表現を見ていく。登場人物が周囲にあるものをどのように捉え

ているのか、またその周囲の物がどのような影響を与えているのかを喩辞別に分類した。

g) 人工物—生物

- (46) 生暖かい空気……、流れ出した真っ黒なオイル。まるで生き物のようにオイルは下水に向かって、這っていた。……ドロリとした滴となって、下水に落ちて消え……そして、ヘルメットを枕にした男の死顔、びっくりした顔。(『リング』p21)
- (47) 石の模様は断末魔の叫びを上げて歪む死人の顔へと変化する。出口に向かって手を伸ばし、無数の悪霊たちが海の藻のようにゆらめいている。妖気漂う直径1メートルばかりの円筒形の空間に小石が落ち、ぼちやりと音をたてて石は悪霊たちの喉の奥に飲み込まれていった(『リング』p276)
- (48) 地中からたくさんの手が伸びて、オレを泥に沈めようとしていると、パニックに陥りかけた。前からも後ろからも横からも、壁が圧迫してくる。逃げ道はないぞと、口を歪めて笑いながら。(『リング』p283)
- (49) (非常口)早くここから逃げると彼を誘っているようだった。(『黒い家』p355)
- (50) やわらかく窄む光の中に、そのナイフは身を横たえていた。(「飢えたナイフ」p130)
- (51) (ナイフは)無垢な表面を銀色に輝かせている。静かに冷たく、深く。(「飢えたナイフ」p130)
- (52) 朝の陽射しのなかで、そこだけ陰に反転したように黒ずんだ異物感をまき散らしながら、リムジンは沈黙する。(『庵堂兄弟の聖職』p115)
- (53) 工房のみならず母屋の豊にできた赤茶けたシミさえも久就の生活を脅かした。(『庵堂兄弟の聖職』p191)

(46)は、オイルが流れている様子を生き物に喩えた直喩である。動詞は「這っていた」となっていることから、人ではなく地面を這う虫や蛇などが連想される。(47)(48)は想像の恐怖に犯されている状況である。壁が死人の顔であり、井戸の中は悪霊の喉となっているが、全体を見ると井戸自体が悪霊であり、また住みかであると考えられる。主人公にとってその井戸自体が自分を死に追いやる悪霊、言い換えれば死人であるといえる。(49)から(53)は物体が主語が人である場合に使われる動詞「誘う・身を横たえる・輝かせる・撒き散らす・沈黙する・脅かす」と共に現れ

擬人化されている。物体がまるで意思を持っているかのように表現されており、主人公が周囲の物体も自分に影響を与えるものだと認知していることが分かる。

h) 自然物—人間・動物

(54) 一段とあたりが暗くなった。椿の幹の下からは曲がりくねった裸の根が幾本も顔を出し、からまり合っている。(『りんぐ』p191)

(55) しかもその表面は雨に濡れてなまめかしく、浅川はふと巨大な怪物の腸の中を走り抜けているかのような感覚に陥ってしまう。(『リング』p191)

(56) 空は一層陰鬱さを増してきたように見える。寒々とした雪雲が密集し、^{ひしめ}き合っていた。(『雪』p125)

(57) 家が無くなっていたらどうしようと、弘三は本当に子どものように泣きたくなった。薄墨色の雲が低く重く、村全体を覆っていた。(『密告函』p55)

(54)は「椿の根」が「顔を出す」と組み合わせることにより、「椿の根」が人に喩えられる擬人化が起こっている。(55)は(54)に続く文であり、椿の道を行く主人公の感覚が直喩で表現されている。「椿の道」が「巨大な怪物の腸の中」と喩えられえている。(56)は「雪雲」が動詞の「^{ひしめ}き合う」と共起することで「雪雲」が「多くの人々」に喩えられていることがわかる。(57)は「雲」が「重い」と「覆う」と結合し異常結合による比喩となっている。雲の様子から村の様子が暗い外部からの遮断という意味がくみ取れる。

i) 自然物—登場人物に被害を与えるもの

自然を視覚でとらえ描写するだけではなく、視覚で捉えたものが体に影響を及ぼしているもの。

(58) 私はその時、自分が、ひとりきりで庭に立っているのに気づきました。……私は急に恐ろしくなって、あたりを見渡しました。(月明かりに)照らされた草や木は、私を息苦しくします。月は…照らすもの自体を影に作り変えます。(『桔梗』p32)

(59) (ナイフの)刃の鈍い輝きが腫から入って触手を伸ばし、胸を締めつけるかのようだ。(『飢え

たナイフ」p131)

(60) Sの手にしている細長い箱……ナイフは間違いなくその中にある。……蓋が開かれる。銀色の光が、私の瞳を射抜いた。頭の中に直接こたえる光だ。(「飢えたナイフ」p130)

(61) ぞくり、と背筋が冷えた。背中をなぶる青い月光は、刃物のように尖っている。(「あまぞわい」p134)

(62) あの晩、影が一斉に私を襲って来た時のように、恐怖を感じて走り出しそうになりました。
(「桔梗」p37)

(63) シズは隣に兄がいないのに気づいた。闇がさらに濃くのしかかってくる。ふいに暗がりから、奇妙な呻き声が出た。シズは息が止まりかける。(「依は件の如し」p201)

i) では見たものが身体に被害を与えるものとして描かれている。視覚から情報や刺激を得て、それが精神や肉体に影響を及ぼしている。(58)では「草や木」を見てそれに恐怖を感じ「息苦しく」なっている。ここでは「草や木」が主人公にとっての恐怖の対象である。(59)(60)(61)では「ナイフの光」が「胸を締め付け」たり「瞳を射抜い」たりし、「光」を生きているもの、または武器で攻撃してくるものとして捉えている。(62)(63)では影や闇が主人公の恐怖の対象となっている。(62)では「影」が「襲う」と表現され襲ってくるもの(敵)となっている。(63)では物語の内容から「闇」が恐怖の対象ではなく、恐怖が「闇」に置き換えられて表現されていることがわかった。したがって<恐怖を感じた>という状況を(63)の比喩で表現している。

6.2.2. 聴覚

6.2.2.1. 音

a) 音—気体の塊

(64) 急発進する車のエンジンやタイヤの泣き声が時々際立つくらいで、街の音はぼんやりとひと固まりになって背後の空間を右に左にと浮遊していた。渾然一体となった音の群れが、ふわふわと人魂のように揺れだしたのだ。(『リング』p300)

(65) 内履きに使っているサンダルが擦れて音を立てる。その音はなぜか、ぬめるような空気にく

るまれてほわり、ほわりと後方へ漂ってゆくような気がした。(『パラサイト・イブ』p180)

音を耳で捉えるのではなく、音を目で捉えているように表現している。(64)では直喩表現で音を「人魂」に喩えている。人魂は人体のリンが空気中で酸化して生じる光であるが、「ふわふわ」や「浮遊していた」、(65)の「ほわり、ほわり」や「漂う」から起こるイメージは雲のような気体の塊である。

b) 音一声

(66) 竜司は……背後の気配をうかがった。……急発進する車のエンジンやタイヤの泣き声が時々際立つくらいで、街の音はぼんやりと……浮遊していた。(『リング』p300)

(67) 彼は全身が耳になったように聴覚を研ぎ澄ませていた。ドアが開きそして閉まる時の、蝶番の発する悲しげな音。(『黒い家』p307)

(68) チン、という乾いたチャイムの音がして、エレベーターが、身じろぎしたようだった。鋼鉄の扉がゆっくりと開いていく。若槻は走り出す姿勢をとった。(『黒い家』p357)

(69) ^{ごうごう}轟々と風が鳴っていた。耳のすぐ後ろで吠えていた。(『あまぞわい』p131)

(66)(67)(68)は音を人間の声に喩えている。(66)はタイヤの音を「泣き声」で表現しており、「車」を「人間」に喩えている。(67)は感情の無いドアの閉まる音に感情を表す「悲しい」を用いている。(68)の場合も同様で、音を修飾している「乾いた」には「感情がなく冷淡」の意味があり、また後文で「身じろぎしたよう」とエレベータを生物化していることから、感情を持っている生き物として人間が挙げられる。(69)では「風の音」を動物が「吠えている」と表現し、風の音の強さや恐ろしさがうかがえる。

6.2.2.2. 声

a) 声一凶器

(70) 吉住は目を閉じ耳を両手で塞いだ。……歯の間から絞り出されるような看護婦の悲鳴が容赦なく耳に突き刺さってきた。(『パラサイト・イブ』p390)

(71) 悲鳴が。獣のような叫びが雨音を切り裂いた。そして呼応するように、もう一つの叫び声響く。

……雨音が、私の足元まで滲み通ってくる。(「飢えたナイフ」p145)

(70) (71)は共に「突き刺さる」や「切り裂いた」と用いられることから、声(悲鳴)はナイフなどのような凶器であるといえる。

b) 声一音

(72) 動物の鳴き声のようなものが洩れ聞こえてきた。……黒板を引っかいたように嫌気をふるわせる奇声。……久就の首筋にはさぶイボが粟っていた。(『庵堂兄弟の聖職』p116)

(73) ひいい、ひいいという看護婦の声がベルと同じくらいの音量で吉住の体を震わせた。(『パラサイト・イブ』p390)

(74) 若槻は背筋に悪寒のようなものが走るのを感じた。……カウンターの周囲には異常な緊迫感が生まれていた。……菰田は、ふうっと深い溜息をついた。まるで、深い穴の底から聞こえてくるような音だった。(『黒い家』p155)

(75) その声に込められた怒りと害意の凄まじさには疑いを容れなかった。……人間の声というより、怒り狂ったスズメバチの羽音を思わせる。(『黒い家』p309)

(76) 視界の中で何かが凄まじい速度で動いていた。……麻里子は歯を食いしばり瞳に力を入れた。誰かがサイレンのような甲高い悲鳴を上げていた。(『パラサイト・イブ』p381)

b)は声を音に置き換えて表現している。そして、声を聞いた主体が聴覚で捉えた声から受けた怖さも表現している。

c) 声一液体

(77) 喉に無理矢理大きなゴム栓を押し込められたみたいに声が出ない(「ジュリエット」p278)

(78) 絶叫は、荒い呼吸に阻まれてすぐにはあがらなかった。(「あまぞわい」p116)

(79) 悲鳴までが喉で固まっている。(「あまぞわい」p115)

(80) 初めてユミの喉から、甲高い悲鳴が迸った。(「あまぞわい」p137)

悲鳴は体という容器の中にある液体だと考えられる。容器から喉を通り口から出るものであると考えるが、その入り口を(77)の「ゴム栓」で塞いだり、(78)に呼

吸に邪魔されて出なかつたり、また (79) のように液体が固まってしまつたりとイメージできる。(80)の「迸る」は液体と共起する動詞である。

6.2.2.3. 静寂

a) 静寂一敵・不快なもの

(81) うめき声ははたとやんだ。後を襲ったのは、しんとした静寂……。 (『リング』p304)

(82) 邸内の静けさがじわじわと身に迫ってくる。 (『飢えたナイフ』p142)

(83) 音の消えたのが気にかかり、静寂が邪魔をしてかえって眠りにつけなかった。 (『音』p94)

(84) しかし歌が止むと、そこにどっと流れ入る静寂の迸りに眠気は飛び散るのだった。 (『音』p99)

静寂とは静かなことであり、普段は邪魔になつたり敵になることはなく、むしろ気分のいいものである。しかし、恐怖心を抱いている者にとっては、静寂が恐ろしく感じるようである。これは誰も居ないという状況を恐ろしく感じるということと、その場の状況を理解しようとして、音を聞き取ろうとする状態になるためだといえる。(81)(82)では「襲った」「じわじわ身に迫ってくる」という表現を使い、静寂を自分に害をなすものに喩えている。(83)(84)では眠りを妨げるものとだということがわかる。

6.2.3. 嗅覚

6.2.3.1. 匂い／臭い

a) におい—生物

(85) もつれあう色彩、からみあう熟れた匂い。……ありとあるフルーツが盛り付けてあつたのだ。

生首といっしょに。(『妹の島』p121)

(86) 大気が濃度を増し、鼻孔から肺のなかまでからみついてくる。どこまでも長く太い蛇を、延々と丸のみさせられているような気分になる。粘るように重く、息苦しい。(『妹の島』p124-125)

(87) 西風に排泄物の臭いは巻き上げられ、影となり微菌となって弘三を追いかけた。(『密告函』p55)

(85) (86)は同じ作品からのものであるため、(85)の「からみあう匂い」は(86)の「長く太い蛇」であろう。匂いが鼻から肺の中に入る様子を蛇を丸呑みしている様子に喩えている。(87)は「追いかけた」と共に使われているため人間や動物をイメージさせる。

b) におい—液体

(88) 肉の腐ったすえた臭い、空気の中に溶け込んで包み込むように。(『リング』p9)

(89) どこまで行っても果物のねっとりと甘い匂いだけが、目の利かない空間を埋めていた。(「妹の島」p124)

(90) ねっとり甘い匂い。熟れた果実の甘い匂いが満ちている。(「妹の島」p124)

においは目に見えないものであり、嗅覚によって存在を明らかにするものである。しかし、(88) (89) (90)は目で匂いを確認している。動詞を見ると「空気の中に溶け込む」「空間を埋める」「満ちている」である。これは気体であるとも言えるが、空気や気体は色が付いていない限り目で捉えることは不可能である。したがって、(88)の「溶ける」や(90)の「満ちる」に注目すると液体であるといえる。液体であるということは、主体がいる空間も液体の入った容器であると考えられる。

6.2.4. 皮膚感覚

恐怖による表情変化は、顔の筋肉や色で表現される。＜顔を引きつらせる＞＜顔色を失う＞などがある。また恐怖による身体部位の生理的変化としては、体温低下に関わる表現がある。＜悪寒が走る＞＜鳥肌がたつ＞などである。

6.2.4.1. 冷

a) 悪寒・寒さ—生物

(91) 悪寒が走った。(『リング』p15)

(92) 背中は泡立っていた。肩のあたりで湧き起こった悪寒が背筋を伝って下へ下へと這い降り、

冷たい汗でTシャツはぐっしょりと濡れていた。(『リング』p11)

- (93) 背筋をナメクジみたいな悪寒に這われながらも、やっぱりヌイグルミは、美也子のために集められていたものじゃなかった。(『庵堂兄弟の聖職』p225)

(91)では「走る」、(92)では「這い降りる」と共に使われ生き物を連想させる。
(93)では「ナメクジ」と直喩で喩辞が示されている。

b) 寒気—攻撃してくるもの (敵)

- (94) 浅倉は不快感に顔をしかめた。……一気に寒気が襲ってきた。歯がかちかちと鳴り始めた。
(『パラサイト・イブ』p261)
- (95) 鉄棒で殴られたような衝撃が骨の芯に走った。右腕が折れたように痺れ、猛烈な悪寒が全身を襲う。(『黒い家』p361)
- (96) 半信半疑の状態で小用を済ませた時、熱を放出した身体は躍り上がるほどの身震いに襲われた。(『音』p103)

(94)(95)(96)全ての例文の「寒気」「悪寒」「身震い」は「襲う・襲われる」と結合しているため、体温低下も主体にとっては襲ってくるもの(敵など)との考えがあるようだ。

6.2.4.2. 触

a) 空気・風—生物

- (97) 悪寒が走った。生暖かな空気が、今、すっと肩先を通り過ぎていったように思う。熱帯夜にかかわらず、木村は体の震えが止まらなかった。(『リング』p15)
- (98) 浅倉は廊下を歩いていた。……どことなく薄気味悪かった。ぬるりと生暖かい風が浅倉の頬を撫でてくる。(『パラサイト・イブ』p180)
- (99) 何もいるはずないじゃないか。……湿った空気が首筋を撫でる。……振り返ったが誰もいない。(『ジュリエット』p129)
- (100) 竜司の体の回りに隙間ができ、そこに得体の知れない霊気が漂った。冷え冷えとした夜気と、肌にまとわりつく湿気が、陰影となって身に迫ってくる。(『リング』p300)

恐怖を感じている主体はつねに周りに存在する空気や風、湿気などにも敏感になっていることがわかる。空気や風がまるで意思をもっているもののように(97)の「通り過ぎる」(98)(99)の「撫でる」の動詞と結合している。(100)は湿気がまとわりつくのは恐怖ではなく、不快である時によく使用する慣用表現であるが意思が感じられ、後述する「身に迫ってくる」は明らかに生き物に喩えた表現であり、恐怖の感情が表れている。

b) 空気—物体 液体

(101) 「これ持つ。あなた……愛する人死ぬ。あなた殺す」車内の空気が、不意に凝固する。

(「飢えたナイフ」p120)

(102) 会長みずから下げた頭を軽んじるような拒絶の態度に、ピリピリと殺気立っている。……工場の空気がまた、奇妙にいびつになる。(『庵堂兄弟の聖職』p130)

(103) 夜道を行く子供のように、私は一心に足元だけを見つめて居間を横切った。どんよりと湿った空気を引きずって台所まで辿り着き、明かりを点ける。(「飢えたナイフ」p139)

(104) 産毛が逆立つような気がした。……なんなのだろう。浅倉は辺りを見渡した。……空気は澱んでいる。(『パラサイト・イブ』p257)

(105) 婦人は憎悪のとげでささくれだった、野太い叫声をはりあげる。工房内の空気が蒼褪めた。(『庵堂兄弟の聖職』p139)

b)の空気は周りの人間が醸し出す雰囲気であったり、その人物の状態であると解釈できる。目に見えない空気を視覚で捉えたかのように、その変化を描写している表現であるが、これは雰囲気を体で感じて、視覚で見える実体のあるものに置き換えた表現である。また、雰囲気はその場にいる人から出ているものであり、この場では緊張や恐怖で自分や他の人物の状態を空気の変化で表現をしている。しかし、空気は目に見えないものであり説明が困難なため、実体のあるものに置き換えて視線で捉えたかのように表現している。

6.2.4.3. 痛

a) 痛み一攻撃してくるもの（敵）

(106) 首筋に冷たい感触があり、竜司は驚いて椅子から立ち上がりかけたが、腰から背中にかけて激しい痛みに襲われて床に倒れこんだ。

(106)では「痛みに襲われる」と痛みを攻撃してくるものに喩えている。

6.2.5. 内臓感覚

内臓に現れる場合は恐怖による興奮状態に陥っている場合であり、呼吸や心拍の増加などに現れる。＜息が詰まる＞＜心臓が高鳴る＞などが慣用的に使われている。

6.2.5.1. 心臓

a) 心臓一打楽器

(107) ソレはヒタヒタと近づきつつあった。……胸は早鐘を打った。(『リング』p301)

(108) 自分の呼吸が異常に速くなり、心臓が激しく打ち始めるのを感じた。(『黒い家』p353)

(109) 書斎、引き出し、ナイフ……。……机に近づき、引き出しの把手に手をかけている。高鳴っていた胸が、不意に静まり返る。……見るだけだ。触りはしない。(『飢えたナイフ』p141)

恐怖を感じる時、内臓の中で一番敏感に動くところは心臓であることは誰でも経験して知っていることだろう。恐怖の中にいる人間の心臓は楽器に変わる。激しく打ち鳴らす打楽器である。

b) 心臓一命

(110) 自分の心臓が底なしの闇に落ちて消えてゆくような感覚を払うことができなかった。(『パラサイト・イブ』p293)

(110)は自分が死んでいく様子を表した文章であり、「心臓」が「命」であり「底なしの闇」が「死」とであると解釈できる二重の比喻表現である。

6.2.5.2. 感覚器官

a) 感覚器官—機械

(111) 木村の脳裏にあの時の光景が甦った。生暖かい空気……感覚器官が一時的な障害に陥ったような具合だった。そして、……男の死顔。(『リング』p21)

感覚器官や内臓は機械のように毎日規則的に動いているもので構造的に類似している。そのため、機械に喩えられる表現はよく見られる。感覚器官は私たちに問題があれば、警告し、指示を出す。そして(111)は障害に陥るといった表現を使い、自分ではコントロールできなくなった状況を表現している。

6.2.6. 精神活動

6.2.6.1. 思考

a) 記憶—生き物

(112) 木村の脳裏にあの時の光景が甦った。生暖かい空気……ヘルメットを枕にした男の死顔。
(『リング』p21)

(113) さっき聞いたばかりの恐ろしい声が生々しくよみがえった。(『黒い家』p315)

(114) 彫像のように動かない子供の姿……。寝返りを打って、頭から必死にその映像を追い払おうとする。(『黒い家』p104)

(115) あの痙攣している足首の感触がまるでルカの中に刻み込まれてしまったみたいにとこまでもどこまでもついてくる。執拗に追いかけてくる。(『ジュリエット』p167)

記憶は消したいと思えば思うほど消えないものである。そのような記憶とは自分ではどうしようもできない第三者となり、また、不快なものへと変わる。(112)は「光景」が「甦る」と(113)は「声」が「よみがえる」と結合し、(114)では、目的語の「映像」を人が「追い払おう」としている。(115)では、「感触」が「執拗に追いかけてくる」と共に使われている。全て記憶の中のものであり、「思い出す」ことを「甦る」と表現し、「忘れたい」を「追い払う」「追いかけてくる」と表現している。このように記憶は生き物のように「甦り」どこまでも「執拗に追いかけてくる」

てくる」。消して死なない生き物であり、この記憶が人間には恐ろしいものであり、苦しめられるものであるといえる。

b) 記憶一取り除けないもの

(116) 漫画に描かれた少女の凄まじい形相が麻里子の頭の隅に張り付いて離れなかった。(『パラサイト・イブ』p221)

(117) その微笑が瞳に焼き付いてしまっていた。瞼を閉じようと思っても閉じることができない、叫んでその光景を掻き消そうと思ってもできない。凄まじいとしかいいようなない微笑だった。(『パラサイト・イブ』p426)

脳は一度記憶してしまえば、どんなにそれを消そうとしても消せないものである。そしてそれは自分の意思ではどうにもできないので、自分にとって邪魔なものとなる。(116)では「形相」が「張り付いて離れない」、そして(117)では「笑顔」が「焼きついてしまった」とあるが、「形相」も「笑顔」も以前に見たものであり、それが忘れられないという表現を「張り付く」や「焼きつく」の動詞を使って表現している。

c) 考え一機械

(118) 逃げろというサインが浅倉の頭の中で明滅していた。(『パラサイト・イブ』p264)

(119) 若槻は、はっとして回想から現実に戻った。いまや頭の中では、はっきりとした警告が鳴り響いている。早くこの場から立ち去れ。(『黒い家』p83)

(120) ふと恐ろしい想像が脳裏を走った。馬鹿な。何を考えているんだ。疲れて正常に頭が機能しなくなっているんだ。(『黒い家』p347)

(121) 父が腹の中で何を考えているのか想像するのがこわかった。しかし、そのときの麻里子の思想は暴走して止まらなくなっていた。(『パラサイト・イブ』p217)

身体器官には機械と同じ表現が使われる。(118)(119)は脳内が司令塔のようになっている。(120)(121)は故障した状態である。自分では操作不能であり、その主体の思考と体が分離して存在しているように表現した文である。

d) 思考一生き物

(122) オレが今立っている足の下。墓だ、ここは、死者の墓なんだ。他のことなんて考えられない。

思考さえも閉ざされて、自由な羽ばたきは許されない。(『リング』p284)

(123) 雷光のように恐ろしい認識が走る。畏だったんだ……。 (『黒い家』p359)

(122)の前後の文脈を見ると、主人公は恐怖によって他のことを考えようとするが、できない状態である。したがって<自由な羽ばたき>をするのは主人公の身体ではなく、「思考」である。<違う考えができない>という状況を<自由な羽ばたきは許されない>と置き換え「思考」が「鳥」に喩えられていることわかる。(123)では二重の比喩が使われている。<雷光のように恐ろしい認識>という形容と<認識が走る>である。この場合、「雷光」は「認識」と「走る」に係り、恐ろしいという性質だけでなく、動的な性質も表現しているといえる。「認識」が雷光のように恐ろしいものであり、「雷光」のように衝撃と共に突然頭に浮かんだという状況を「走る」で表現していると読み取れる。

6.2.6.2. 心

a) 気分一脅かすもの

(124) 若槻は駅名のアナウンスを聞いた時にひどく不吉な気分に襲われた。(『黒い家』p80)

(125) 若槻は……立ちつくしたまま懸命に嘔吐したいという欲求と闘っていた。(『黒い家』p88)

(126) 裏庭で聞いた話を思いかえすたび、たまらない嫌悪感に胸を灼かれ、……シミさえも久就の生活を脅かした。(『庵堂兄弟の聖職』p191)

(127) 色彩が陰鬱に褪せるような、暗い感覚にとらわれていた久就の視界の隅で……かすかに動く影を感じた。(『庵堂兄弟の聖職』p137)

b) 気分一人間

(128) 若槻はとにかく、一刻も早くその場を立ち去りたい気分に駆られていた。(『黒い家』p81)

(129) 早くこの場を立ち去れ。焦燥感に似た不快な感覚が、彼を急き立てていた。(『黒い家』p8

3)

(130) 彼は階段を上り出していた。正気の沙汰じゃないぞと心の中の声が警告する。菰田幸子は八階で彼を待ち受けているはずだ……。『黒い家』p354)

a)とb)は、主体の心と主体自信が別々のものとして表現である。a)では体の内部にある心に主体が脅かされている。b)では心が主体を動かそうとしていることが分かる。

次に恐怖の感情の比喩についてみていく。

c) 恐怖一攻撃してくるもの

(131) 恵みは糸鋸を見て、再び恐怖に襲われたように暴れ始めた。『黒い家』p326)

(132) 若槻は小走りに階段を駆け上がった。……不意にエレベーターが唸りを上げた。心臓をわずかみされたような恐怖が襲う。『黒い家』p353)

(133) 震えは止まらない。奥の襖を見るだけで、たまらない恐怖が襲ってくる。『遠い記憶』p45)

(134) あと六日間。恐怖は真綿で首を絞めるようにじわっじわっと輪を縮めてくる。先で待ち構えるのは死。『リング』p98)

(135) 長尾は……ショックを受けたのではない。なぜあのことを知っているのだろうか、その疑問が閃いたとたん、いい知れぬ恐怖に全身を貫かれたのだ。『リング』p248)

(136) 浅川が目つきが少し変わっている。死の恐怖が冷静な思考力を奪い去ってしまったのだ。一見して、正常な判断力を欠いていることがわかる。『リング』p279)

(137) 今でもそこに死体がぶら下がっているような気がしてならない。若槻は、心の中で湧き上がった迷信じみた恐怖と闘った。『黒い家』p319)

(138) 彼女はひとりで不安や恐れと闘った。『雪』p114)

(131)から(133)は恐怖と「襲う」が結合している。(134)では恐怖は「首を絞める」と結合しているが、これは恐怖を人間だと捉えていることも同時に理解できる。(135)の「貫く」では、恐怖自体が武器として考えられるが、それを扱う存在も考えられる。(136)の「奪い去る」も人の行動として使用される動詞であり、(137)と(138)では、恐怖と接触し闘っている。明らかに敵などの危害を加えるものだとみなしている。(131)から(138)の全体を見ると、恐怖とは人間であり、攻撃をして

くる敵であると考えられる。

d) 恐怖—不快な生き物

(139) 闇の中から今にも菰田幸子が飛び出してくるような恐怖が彼に取り憑いていた。(『黒い家』p358)

(140) 立ち去るなら今だ。恐怖感がまだどこかにとどまっています、背筋まではい上がってはいない今を逃せば、自分もまた気がふれる。(『密告函』p78)

(141) 夏代は、その日に限って、突然家の中に歩み入ってきそうな恐怖に捉えられている。(『埋葬』p253)

(142) 自分をなくしてしまえ！そうすれば、恐怖からさえ逃れることができる。土に埋まって自然と一体になるんだ！その願いが通じたのか、浅川は急激な睡魔に襲われて意識を失いかけた。(『リング』p271)

(139)では「取り憑く」と幽霊などに使われる動詞と共にあらわれ、幽霊という恐怖を感じるものと同化している。(140)の文章の「恐怖感がまだどこかにとどまっています」のどこかは、後半の「背筋まではい上がっていない」から体の中だということが分かる。恐怖は体の中に潜んでいて、いつか背筋まではい上がってくると解釈ができることから、恐怖は「生き物」だと考えられる。そして(141)の場合「捉える」が使われているが、「捉える」のプロタイプ⁴¹として「捕まえる」が挙げられる。これは何かに捕まっていると解釈ができる。したがって、(139)(140)(141)では恐怖は主体にとって不快なものであることがわかる。そして、恐怖から「逃れる」という表現も使われている(142)からも同上のことが言える。

このように、a)やb)から恐怖の感情は「襲う、奪い去る、闘う、捉える、とどまっている」とともに使われ、恐怖は行動をする「人」に喩えられていることが分かる。また、「恐怖は首を絞めるように」や「恐怖に全身を貫かれた」、「恐怖から逃れることができる」などから、恐怖は攻撃をしてくる「敵」などのように私たちの脅威となるものと同じ概念を持っている。

⁴¹ カテゴリー内の代表と思われるもの。例えば、日本であれば花のプロタイプは桜になる可能性が大きい。ここでは、「捉える」の代表となる意味で「捕まえる」をあげた。

一方、恐怖が「薄まる、湧き上がる、にじむ」と共に現れる場合がある。

e) 恐怖—液体

(143) 浅川が例のビデオを見てしまってから、二十四時間が過ぎようとしている。……恐怖の感情は薄まるのではないかと、ハナ金の六本木を待ち合わせの場所を選んだ……(リングp97)

(144) 今でもそこに死体がぶら下がっているような気がしてならない。若槻は、心の中で湧き上がった迷信じみた恐怖と闘った。(『黒い家』p319)

(145) 姉らが形相凄まじく荒れ狂うさまを嫌悪に眉をひそめ、好奇心に瞳孔を開き、口元には嘲笑を浮かべ、子供や恋人を握る手には恐怖をにじませて見つめていたものだ。(『姉飼』p8)

これらは液体と結びつく動詞であり、液体の持っている概念で恐怖を認知していることがわかる。これは、恐怖だけにあてはまるものではなく、感情一般に使用されるものである。

(146) 友達の言葉で悲しみが少し薄まった。

(147) 悲しさ(うれしさ)で一杯になった。

(146)では、「薄まる」という動詞と結びついていて、感情を液体ととらえているためこのような表現が生まれる。(147)では、悲しさやうれしさといった感情が一杯になるとあるが、これは身体を容器だと捉え、そこにある感情が心の容器に一杯になるというイメージである。容器に一杯になるのは液体だけではないが、液体に使われる「薄まる、湧き上がる、にじむ」といった動詞と使われることを見ると、液体と同じ概念を持っているといえる。心理学者の島崎(1952)でも不安と恐怖の違いを説明する際、「不安は恐怖の血を水で薄めて量をふやしたよう」と記述し、不安と恐怖を含めた人間の感情は液体に喩えられて理解していることが明確である。しかし、恐怖の感情のみではないため、恐怖の比喩の特徴としてあげることはできない。

6.2.7. 考察結果

味覚を除いた4感覚に加え、内蔵感覚、そしてそこから起こる精神活動に関する比喩表現を見てきた。感覚別に考察した結果をまとめたのが、表5⁴²である。

表 5

感覚			概念
視覚(57)	目・視線		①独立したもの ②紐 ③武器 ④容器
	描写	人	①恐ろしいもの ②状態異常
		物	①生物
		自然	①人間・動物 ②害のあるもの
聴覚(21)	音		①気体 ②声
	声		①凶器 ②音 ③液体
	静寂		①不快なもの ②敵
嗅覚(6)	匂い・臭い		①生物
皮膚(52)	冷		①生物 ②敵
	触		①生物 ②物体・液体
	痛		①敵
内臓(17)	心臓		①楽器 ②命
	感覚器官		①機械
精神活動(74)	思考	記憶	①生物 ②取り除けないもの
		考え	①生物 ②機械
	心	気分	①人間 ②脅かすもの
		恐怖感情	①敵・脅かすもの ②液体

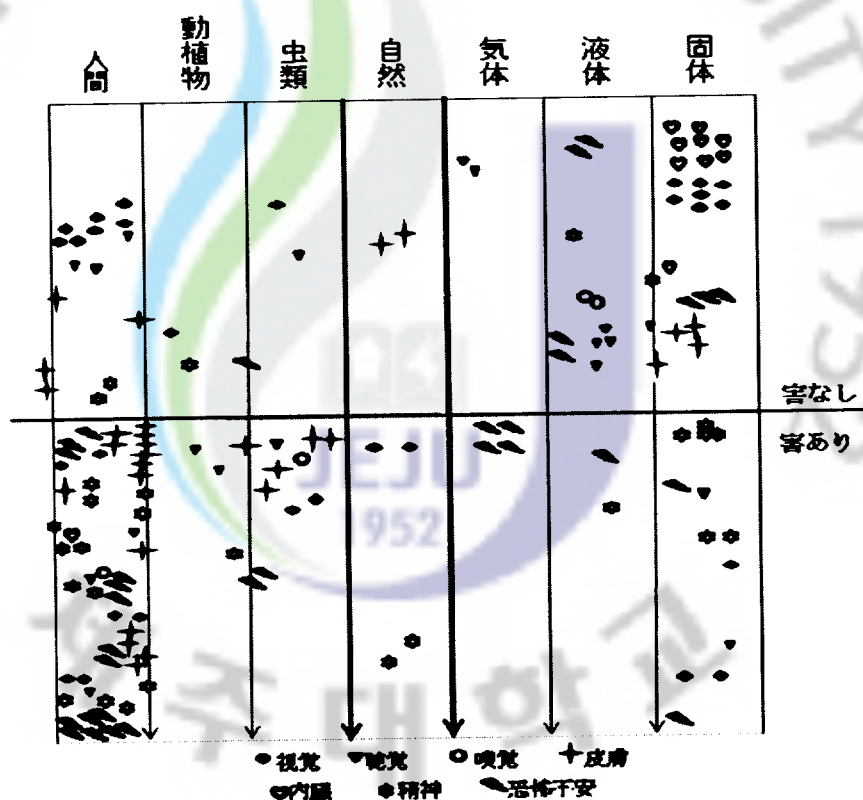
ほとんどの項目に、生物であったり、脅かすものであったりと感覚主体に影響を及ぼすものが挙げられた。特に目立つ特徴として「静寂」と「空気・風」があげられる。静寂のイメージは「危険なもの」とかけ離れているが、恐怖の状況下にいる人間には静寂は恐ろしくなる。また、そよぐ風や私たちの周りにつねにある空気なども普段では気持ちがいいものであったり、意識されないものであるが、それさえも生物となり主体に影響を与えるものと変化している。しかし、いくらホラー小説とはいっても恐怖の対象や主体にとって影響を与えるものとならなかったものもあった。それは音と心臓である。音と声は聴覚で捉えられるものであるが、声は凶器となり音は凶器とはなっていなかった。声には人間の感情もこもっているため、聞く人には声と共に感情も伝わるため主体に影響を与えやすいといえる。しかし、今回の調査では見られなかっただけであり、音が決して影響のあるものにならないわけ

⁴² 表の () の数字は比喩表現の数。

ではない。〈音は少しも流れず、硝子の破片のようにとげとげしく胸に刺さり〉⁴³
 という比喩文から、「音」が「硝子の破片」になり胸に刺さるという表現は主体に
 として凶器となっていることがわかる。そして心臓も構造上の比喩としての表現だ
 けであったが、比喩辞典から〈心ノ臓は口から飛び出しそうに踊りくるっている。
 〉⁴⁴という表現が見つかった。恐怖の対象となっているわけではないが、心臓を自
 分の体の一部ではなく生き物に喩えていて、なんらかの影響を与える存在となっ
 ていることがわかる。このように今回の調査対象にはなかったからといって、音と心
 臓は感覚主体に影響を与えるものとならないと結論付けることはできない。

次に、考察して導き出した概念を分布図 1⁴⁵で表した。

分布図 1



分布図 1 の左側から人間・動植物・虫類（昆虫、爬虫類など）で、生物の項目で

⁴³ 中村明(1995)『比喩表現辞典』角川書店, p18から引用 (三島由紀夫『美德のよろめき』)

⁴⁴ 中村明(1995)『比喩表現辞典』角川書店, p185から引用 (藤沢周平「三ノ丸広場下城どき」)

⁴⁵ 恐怖不安は五感ではなく、精神の心の項目であるが、本研究は恐怖の感情についてであり、恐怖とは何かをわかりやすくするために、五感と同様に分布図に載せた。

ある。図の右側は人工物として、固体・液体・気体とした。そして、中心にあるのが自然物の項目である。上下に分けてあるのは、感覚主体にとって、対象になっているものが害のあるものか無いものかを示すためである。恐怖を感じている主体が外界のものを何に喩えているのかを考察したが、恐怖を感じている状況下で五感で感じているものを自分への影響があるものや害を及ぼすものに喩えている場合と、そうでない場合があったため、それをはっきりさせるために上下で分けて載せた。下へ行くほど害の程度が大きいものとした。

分布図の全体を見ると、左下の部分に多く集まっていることがわかる。生物の項目であり、害のある部分である。もっと細かく言えば、人間の項目に集中している。次に多いのが右上の部分で、人工物の項目で、しかも害のないものである。人工物の害のあるものと、生物の害のないものは大体同じくらいである。図外のもは幽霊など想像上のものである。この分布図は比喩の対象になっているものが何に置き換えられて理解されているかを表すもので、ホラー小説の中で登場人物が恐怖を感じているとき、主体の周囲のものを害のある人間に喩えているのが最も多いことを明らかにしている。したがって、人物の感覚器官から感じ取っている多くのものが、その主体にとって脅威のものに変わっていることが分かる。

感覚別に述べると、視覚は生物の害のあるもの害のないもの、人工物の害のないものの数が同じくらいであり、人工物の害のあるものは少数である。視覚は外界の多くの情報を捉える重要な感覚であるが、捉えたものは恐怖を感じていても特に偏って表現されないことがわかる。聴覚の場合も一つに偏るのではなく、それぞれの項目に散らばっている。嗅覚は用例が少ないため特定はできない。皮膚感覚は半分以上が害のあるもので表現され、生物の項目に集中している。内臓感覚はほとんどが人工物の固体で表現されている。内臓の構造上の類似点を物体に当てはめて表現しているものが目立ったからである。精神はほとんどが害のあるものになり、その中で多くが人間の項目に集中している。最後に、恐怖不安の感情の多くは害のあるもので表現されている。害のない部分に印されたものは感情一般に共通する概念である。分布図1で表したように喩辞としてあらわれるものは害のある生物、特に人間に喩えた表現が多かった。これは人間が一番恐ろしいものであるとの概念が私たちの心理の中にあるからと結論付けることができる。

VII. おわりに

本研究では、ホラー小説から主人公が恐怖を感じている場面で使われている比喻表現を採集し分類し、主人公（感覚主体）がどのように内外世界を認知しているのかを明らかにした。最初に、恐怖とは何かを考察した。恐怖とは人間の感情の中で一番ネガティブな感情であるが、その中でも程度があり、また恐怖を感じるものも周りの環境や経験によって個人的に差があることがわかった。研究対象の小説でも同じ「ホラー」であっても怖さの程度や対象はまったく違った。次に被喩辞として現れるもの、喩辞として現れるものを調べた。被喩辞として使われているものは、人物の感情を表すものが多かった。それは比喻採集時に人物が恐怖を感じている場面に限ったためである。喩辞として多く現れたのは人間の項目であった。また恐怖を感じている主体の状態を表す表現に体温低下や身体機能不能を表現する比喻も目立った。そして次に主体が恐怖を感じている時に自分の感覚や外界をどう捉えているのか明らかにするため比喻文を主体の感覚別に視覚・聴覚・嗅覚・皮膚感覚・内臓感覚・精神に分類し、どのようなものに喩えられているのかを考察した。その結果、感覚で得られた情報や自分の感覚を害のある生き物に、そして特に人間に置き換えている表現が多かった。感覚主体が恐怖を感じている時は、周囲のものほとんどが自分を脅かす存在となり、その存在とは感情・意思のあるものであった。主体にとって恐ろしいものとは感情や意思のあるもの、つまり人間である。比喻表現を使って命の無いものが命のある意思のあるものに置き換えられているのである。考察の結果で出た喩辞が害のある人間の項目に集まったのは、ホラー小説の特徴であるといえ、また人物が外界をどのように認識しているかという問いに対しては、恐怖を感じている場合、外界のものほとんどを脅威に感じているといえる。全てが主体にとって影響力があるものとはならなかったが、書き手や読み手は外界のほとんどが恐怖の対象となると認識していることが明らかになった。

【参考文献】

- 赤羽研三 (1998) 『言語と意味を考える—隠喩とイメージ—』 夏目書房
- 秋元美春 (2002) 『語彙』 語文学社
- 内海 彰 (2006) 「隠喩はどのように理解されるか?—計算モデルによる検討—」
『日本認知科学大会発表論文集』23巻, pp44-47
- 沖 裕子 (2004) 「比喩の形式と意味—本語教育のための基礎的研究—」『信大日
本語教育研究4』信州大学人文学部日本語教育学研究室, pp2-15
- 大石 亨 (2008) 「感情のメタファーの日英差をもたらす要因についての考察」
『日本認知言語学界論文集』第8巻, pp274-284
- 大木幸介 (1983) 『感情はいかにしてつくられるか』 講談社
- 河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』 研究社出版
- 楠見 孝 (2002) 「メタファー研究の総括、21世紀に向けて: 認知心理学の立場か
ら」『日本認知言語学会論文集2』, pp268-271
- (2004) 「物語理解における恐怖の生起メカニズム—怪談とメタファー—」
『表現研究』第82号, pp16-26
- (2005) 「認知心理学からみた比喩」『日本語学』第24号 明治書院,
pp26-36
- 酒井彩加 (2003) 「日本語の共感的比喩(表現)に関する記述研究」
- 佐藤信夫 (1978) 『レトリック感覚—ことばは新しい視点をひらく』 講談社
- 島崎敏樹 (1952) 『感情の世界』 岩波書店
- 鈴木宏昭 (1999) 「人間の認知におけるカテゴリーと類似」『日本語学』第18巻
9号 明治書院, pp69-78
- 瀬戸賢一 (2007) 「メタファーと多義語の記述」楠見孝編集 『メタファー研究の
最前線』ひつじ書房, pp31-61
- 高橋敏夫(2010) 「プレカリアート文学とプロレタリア文学のあいだに—ホラー小
説・『蟹工船』・雨宮処凛的転回」『国文学 解釈と鑑賞』4月号,
至文堂, pp27-34
- 寺井あすか, 中川正宣, 徳永健伸 (2006) 「比喩理解過程における創発特徴の心理

- 実験による検証」『日本認知科学大会発表論文集』23巻, pp388-389
- 中村 明 (1977) 『比喩表現の理論と分類』 国立国語研究所, 秀英出版
 (1995) 『比喩表現辞典』 角川書店
- 野内良三 (2000) 『レトリックと認識』 日本放送出版協会
- 半沢幹一 (1979) 「上代の比喩表現について—共通性と素材の関連から—」『国語学研究』第19号 東北大学文学部国語学研究所刊行会, pp36-47
 (2004) 「わけたい比喩」『日本語学』第23巻4号 明治書院, pp84-93
- 宮武利江 (2003) 「比喩と感情表現」『日本語学』第22巻1号 明治書院, pp56-64
- 宮本敏夫 (2002) 『脳のはたらき 知覚と錯覚』 ナツメ社
- 山梨正明 (1999) 「外界認知と言葉の世界—空間認知と身体性の問題を中心に—」『日本語学』第18巻9号, 明治書院, pp4-14
 (2007) 「メタファーと認知のダイナミクス 知のメカニズムの修辭的基盤」楠見孝編集『メタファー研究の最前線』 ひつじ書房, pp3-29
- 吉村公宏 (2004) 『はじめての認知言語学』 研究社
- アンリ・ピエール・ジュディ著, 石井直志訳(1989)「おびえる象徴体系」今井仁司監修『恐怖』リポート, pp65-77
- フィリップ・デュボワ著, 下川茂訳(1989)「身も凍る恐怖—恐怖の図像あるいは様々な情念、表情から表現へ—」今井仁司監修『恐怖』リポート, pp207-220
- リチャード・E・シトウィック著, 山下篤子訳(2002)『共感覚者の驚くべき日常』草思社(原典: Richard E. Cytowic, THE MAN WHO TASTED SHAPES)
- Kovecses, Z. 2000 "Metaphor and emotion : Language, culture, and body in human feeling." Cambridge University Press
- Lakoff, G. & Johnson, M. 1980 "Metaphors we live by" University of Chicago Press
- 김주연 (2007) "日本語에서의 感情關聯語「恐怖(怖)」의 表現 様相"『일본어 문학』 Vol.35 한국일본어문학회

【辞典】

- 『岩波国語辞典』第3版 岩波書店, 1979
『外国人のための基本語用例辞典』(第3版) 文化庁, 1971
『現代形容詞用法辞典』 東京堂出版, 1991
『広辞苑』 第五版 岩波書店, 1998
『国語慣用句大辞典』 東京堂出版, 1998
『国語大辞典』 新装版 小学館, 1989
『新明解国語辞典』 第2版 三省堂, 1974
『大辞林』 第二版 三省堂, 1995
『日本語大辞典』 講談社, 1992
『日本語基本動詞用法辞典』 大修館書店, 1993
『類語大辞典』 講談社, 2002
『Dictionary of American English』 Longman, 2000
『中日辞典』 小学館, 1999
『대한민국 나라말사전』 YBM si-sa, 2003

【出典一覧】

- 恒川光太郎 (2008) 『夜市』 角川書店
伊島りすと (2003) 『ジュリエット』 角川書店
岩井志摩子 (2002) 『ぼっけえ、きょうてえ』 角川書店
遠藤周作編 (1993) 『現代ホラー傑作選 第1集 それぞれの夜』 角川書店
・高橋克彦「遠いきおく」 ・三浦哲郎「楢円形の故郷」 ・黒井千次「音」
・河野多恵子「雪」 ・澁澤龍彦「鬮籠盃」 ・山川方夫「お守り」
・三島由紀夫「怪物」 ・阿川弘之「浴室」 ・吉行淳之介「埋葬」
・遠藤周作「その一言」
遠藤徹 (2006) 『姉飼』 角川書店
貴志祐介 (1997) 『黒い家』 角川書店
真藤順丈 (2008) 『庵堂三兄弟の聖職』 角川書店

鈴木光司（1991）『リング』 角川書店

瀬名秀明（1995）『パラサイト・イブ』 角川書店

村上龍編（1993）『現代ホラー傑作選第2集 魔法の水』 角川書店

- ・村上春樹「鏡」 ・山田詠美「桔梗」 ・連城三紀彦「ひと夏の肌」
- ・椎名 誠「箱の中」 ・原田宗典「飢えたナイフ」 ・吉本ばなな「らせん」
- ・景山民夫「葬式」 ・森 瑤子「海豚」 ・村上 龍「ペンライト」



[Abstract]

In Consideration of Metaphor Expression of Fear
-Through senses of the main character of the horror novels-

Ito, Emi

Department of Japanese Language and Literature,
Graduate School of Jeju National University

Supervised by Professor Lee, Chang-Ik

The most important function of language is information delivery. A lot of metaphor expressions are used to help a person's language comprehension. In recent years, a linguist from the United States, Dr. G. Lakoff, advocated the conceptual metaphor. Following, the focus is applied to language recognition in researching the metaphor.

In this thesis, the metaphor of fear is analyzed and classified. In addition, the language recognition is clarified looking at the person who understands the metaphor.

I picked up metaphors from horror novels that scenes are only when characters felt fear, and then I classified them by two methods.

First, the topic and vehicle of the sentence is classified into nine categories (a human, an animal, plants, a natural phenomena, an artificial material, human's body site, person's feeling and senses, an abstraction thing, and an unknown thing) according to meaning.

As a result, most—or about half- of the topics are grouped according to a person's feeling and senses; while the majority of vehicles are grouped as human qualities.

In consideration of how to understand the external world when one experiences fear, metaphors are classified according to a person's senses which are six senses in which the visceral sensation is put in human's five senses. And also the mental activity caused with the sense was included. When I considering them, I classified the external world in

to two categories (living things and artificial material) and then, these are classified into seven categories (a human being, plants and animals, insects, gas, liquid, solid, and natural phenomena).

As a result, a lot of information obtained by the senses is replaced by living things, such as an enemy, a tormentor, a human being, etc. However, some aren't replaced by living things; eyes, voice and sound, a heart, and a word.

It is understood when a person experiences fear, many things are replaced around us with the recognition of a threatening existence.



